

如くである。漢名氏は都岐越を次上と解して以上の如く説明してゐる。

秦の始皇の正胤が太秦の名の下に我が國に來朝したことは姓氏錄にも述べてある。太秦といふ音は、恐らく有秩から來てゐると思ふ。亦秦をハタと訓むのは、白提奚といふ地名に由來するものゝ如くである。

漢民族が結局東大神族を驅逐して、中原を支配するに至つたことは既述の通りである。恐らくこれが爲に、東大神族は、次第に支那の外域に移住するの餘儀なきに至つたものと想像される。萬里の長城の北部に住んでゐた匈奴、並に其の西に倚つて居た烏孫や、大日氏等は、確かに彼等の後裔と考へられる。河南省安陽縣城の西北、洹水のほとりにある一部落小屯村附近の「殷墟」、すなはち殷王朝の都址から、殷代の遺物がさかんに發掘されてゐる。

而して其中に見出される「甲骨卜辭」、即ち骨片文字は、世界最古の支那外域關係の文獻である。之に據ると、遼くシベリヤ地方からトルコ地方にかけて文化の交流が行はれ、それが支那文化の基礎となつてゐるものゝ如くである。一般東洋史學によれば、殷は東方ツングース系民族を本幹とするものである。尙民族學に於て、日本民族とツングースとは同系とされてゐる。殷の紂王は、支那史上暴虐なる君主の代表的なものとなつてゐるが、之は政治謀略の上から、

又周の放伐を正當化せんが爲に後世作爲されたものである。これが殷族と周族との民族闘争を反映してゐることは、今日の學者が殆ど一致して認めるところである。

周の中頃より戰國時代にかけて、支那外域、即ち今日の蒙疆地方に威を振つてゐたのは「東胡族」と「匈奴族」である。東胡族は匈奴と同様現在の蒙古民族の祖先である胡民族の一部族であつた。この東洋史上の胡民族こそは、「契丹古傳」に云ふ東大神族と考へられる。東胡族匈奴族の苗裔が、鮮卑、烏桓の諸族となつて東洋史上にあらはれてくる。

匈奴族は常に周を侵し、之を東遷せしめた強大な部族である。支那の古文献「穆天子傳」の中に、周の穆王が甘肅地方を周遊して、「閼氏胡」なる一部族の地を通過したといふ記事がある。この「閼氏胡」のアツシはアシであり、阿辰法須のアシと關係があるやうである。即ち「閼氏胡」は東大神族に屬するのではないかと思はれる。「穆天子傳」は周の後期、すなはち戰國の一諸侯魏の襄王（西紀前三一八——前二九七）の陵墓から發掘された古圖書であつて、周朝第五世の王、穆王が蒙古甘肅地方の大旅行を試みたその旅行記をしるしたものである。

匈奴の西方には、大月氏國を建てた月氏族が居た。月氏は「月支」とも寫され、甘肅省の西部から新疆省の東部にかけての大地區に遊牧してゐた強大な民族であつた。月氏は今日、學界

に於て、當時東トルキスタンに繁榮してゐたアリア人種ともまたトルコ種とも、更にチベツト族とも云はれるが、未だ決定してゐないのである。

匈奴の苗裔である烏桓、若しくは烏孫族や、大月氏等は、これまた「東大神族」に屬するものであらう。烏孫又は烏桓なる文字は、「大神族」の轉化したものと思はれる。白鳥博士に據ればロシアの學者アリストフは、烏孫を以て今日の「カラ、キルギユ」(—Kara, Kirgiz)であると言つてゐる。此の場合の「カラ」も、恐らく「しうから」の「から」と何か關聯性があると思ふ。

西暦前百七十六年に匈奴の冒頭單于が、漢の武帝に送つた書面の中に「定樓蘭。烏孫。呼揭及其旁二十六國、皆爲匈奴」と記してゐる。樓蘭は後世の鄯善であつて、羅布泊の近傍に住み、呼揭はバイカル湖南方に據つた民族である。従つて烏孫も、矢張りバイカル湖の近くに居たものと解される。

ミュウ大陸論

以上の所説はチャーチワード大佐の説く「ウイグル帝國」と深い關係を持つてゐる。

米國のチャーチワード大佐は、今から約一萬二千年前に、太平洋に陥没したと傳へられる一ミ

ユウ大陸」(The continent of Mu)に就きて、啓蒙的な書物を書いてゐる。彼は印度の或る寺院に於て、人類發生の聖地ミュウから、神聖なる文献と宗教と科學とを教傳するがために派遣された神官團體、「ナーカル」(Nacal)が遺した太古の文献を發見して、これに想像を加へて「ミュウ大陸」の歴史を書いたのである。

チャーチワード大佐は、ミュウ大陸が人類發祥の地であつて、聖書にあるエデンの園は此の大陸に外ならぬと述べてゐる。ミュウは亦、「太陽の帝國」と呼ばれ、その紋章は八方に光被する太陽の姿であつた。太陽は「王様中の王様」と謂ふ意味をもつてゐた。而してミュウ帝國は、東西五千哩・南北三千哩の大陸であつて、三つの部分から成つてゐた。人口は六千四百萬を算し、其の最盛期に於ては驚くべき文化が創造された。其處から世界各國に人類が移住した。彼等は極めて快活なる航海者であつて、當時ミュウと各大陸との海運は隆盛を極めて居た。

然るに地球上に大變動が屢々起り、ミュウ大陸の南端が震動し、火山は大爆發を起し、到る處に灼熱した熔岩が流出した。其後一時激震は杜絶えたが、數世紀を経て再び大陸全體が大地震の襲ふところとなり、その驚く可き文化も悉く破壊された。而して一夜にミュウ大陸は寸斷せられて、遂に太平洋の海底深く沈んで了つた。大佐は、今日南太平洋上に散在してゐるタヒ

チ・ファイジイ・イースター等の諸群島は、ミュウ大陸の残骸であると述べてゐる。

此の人類の母國たるミュウ帝國の原住民が作った最大の植民國を、ウイグル(Uigur)帝國と云ふ。此の帝國は廣大なる地域を占め、其の南端は、印度・ビルマ・安南・ベルシャの一部に達し、東端は黄海と太平洋に面し、北端は北氷洋に及び、西端は現在のモスクワ地方にまで達してゐた。チャーチワードは、ウイグル人がアリアン人種であつたと述べてゐる。もつとも支那の文獻に據ると、北方のウイグル人は、青い眼と白い髪を有したのに反し、南方の者は黒い眼と黒い髪を持つてゐた。

チャーチワード大佐に據ると、ウイグル帝國は、ノアの大洪水に依つて、徹底的に破壊せられ、彼等が建設した多くの美しい都會は皆押し流されて了つた。それ迄は平原であつた現在のゴビの沙漠の周圍には、大きな山々が隆起して、人類の交通は全く杜絶して了つたのである。此等の山々が噴火しつゝあつた當時、ウイグル帝國の住民達は、慌てふためいて山中に避難した。此等の避難民が洪積層時代に於て、ヨーロッパに移住した。それがスラブ族、チュートン族、ケルト族、アイルランド族、スペインのバスク族等である。

ウイグル帝國の首都はバイカル湖の南方にあつた。チャーチワード大佐の著書の中に、「チ

ベットの或る寺院に保存されてゐるナカールの文書によれば、七萬年前にナカールが母國の神聖なる文書の寫しをウイグルの帝國の首都カラコタに持つて來た。この都は「バイカル湖の南方にある」と誌されてゐる。ロシアの考古學者カスロフは、「カラコタ」の遺跡を發掘し、そこに古墳を發見してゐる。その中から各種の貴重な遺物を發掘したが、其等の或るものにはミュウ帝國の太陽の紋章が刻まれてゐた。

なほチャーチワードは、支那文明はウイグル帝國の文明に發祥してゐると主張してゐる。

我々はチャーチワードの説く「ウイグル帝國」と、アジア大陸を統治してゐた「東大神族の國家」との間に、何か深い關聯のあることを直感する。

日本に殘つてゐる或る太古の文獻には、太平洋に陥没せる國として「ミヨイ國」と「タミアライ國」の二大國のことが記載されてゐる。このミヨイ國こそは、すなはちミュウのことではなからうか。ミヨイの住民は日本から渡來して行つたもので、日本の天津日嗣の皇子が、ミヨイを支配されたと誌されてゐる。處が蒙古に於て發見せられた古代地圖によると、わが日本と、陥没せるミュウとは、陸續きの一大島嶼を形成してゐることである。もし之が眞實ならば、ミヨイと日本とは、當然重大なる關係を持つてゐる譯である。何れにせよ、チャーチワードの

ミユウ大陸説は、再検討を要するもので、人類發祥の地は實は日本であり、ミユウ大陸の住民は日本と同民族であつて、日本から分派して行つた日本神族の分族であらうと思はれる。東大神族もさうであり、ウイグル帝國も亦さうである。

既述の如く、東大神族とは、東方の神族たる日本民族の中から生れ出て來たものである。而して「うから」と云ふ言葉は、大陸に行くに濁つて「うがら」となり、更にそれが「うぐる」と轉音することは極めて自然である。而して「うぐる」はウイグルに通ずるのである。我等はかくて東大神族と、ウイグルとの離るべからざる關聯を見出すのである。故にウイグル人は、わが日の本から移住せるものであると斷ずる。

チャーチワードの説に據ると、ミユウ大陸から古代ギリシヤに移住した民族のことを「カラマイヤ」若くは「カラ」と呼んだ。わが國語の「カラ」は「神族」即ち、生命の太源たる神の中から生れて來たものと謂ふ意味である。然るにこれが世界各國の言葉にあらはれてゐる事實から推して、日本が人類の發祥地であると云ふことを推測し得る。日本は日の本、即ち靈の本であり、生命の本源と云ふことである。例へば朝鮮も「韓」であり、支那も「唐」であり、バビロンの古名も「カラ」であつた。ギリシヤ人も「カラ」と云はれた古代を持つてゐる。

「契丹古傳」に於て東大神族の朝廷を、「蓋瑪耶」と名づけてゐるが、「蓋瑪耶」とは「高天宮」の意であらう。何となれば同書に於て「高天」を「胡馬」と訓ませてゐるからである。従つて「マヤ」は、「天宮」または「天の家」の義を持つ。チャーチワードは、ミユウ大陸から各國に移住した民族を總稱して「マヤ」(Maya)と名づけてゐるが、このマヤは、「天宮」と何等かの關係を有するものではあるまいか。

次に、朝鮮、すなはち韓を、古代に於て「コマ」と呼んでゐた。されば「カラ」と「コマ」とは其の内容が同じであつたと思はれる。「コマ」と呼ばれた地方は韓土全體であるばかりでなく、遠く遼東にまで及んでゐた。而も「コマ」は、單に地名たるに止まらず、族名ともなつてゐる。漢書西域傳の「烏孫」の條に「昆莫は本是れ王號にして其の人の名は獵驕靡なり。故に書して昆彌と云ふ。昆は昆莫に取り、彌は驕靡に取る。彌と靡は音に輕重あるのみにして蓋しもと一なり。後遂に昆莫を以て其の王號を爲せるなり。云々」と述べてゐる。これに據ると「昆莫」と「昆彌」とは同一の王號である。「昆彌」が王號として崇められた理由は、それが神又は上の意義なるが故ではあるまいか。「コマ」は「カミ」の轉じたものと云ふことが出来る。かく見れば「カラ」即ち「神族」が「コマ」と稱されるに至つたのである。

神代に於ける東亞一家體制

元來「契丹古傳」は、「契丹」即ち「遼」の太宗が耶律羽之に命じて作らしめた「神領叙傳」の別名であつて、「神領」

は東大神族の祖先たる日孫辰須瑳珂を讃め頌へたものである。契丹王は東大神族の苗裔として東方を向き、太陽を神拜した。従つて遼には「祭東」と云ふ熟語すら存在してゐたのである。漢民族は「天子南面」と云ふが、契丹族は「尊者東面」と云ふた。

「契丹古傳」第四十二章に於て

「皇上（太宗徳光）喜然として曰く。朕の先は神子奇契丹燕より出でたり。謂はゆる炎帝は是なり。五原今に於て之を復する能はずんば何を以て能く見へんや。朕當に輒ち善くすべきなりと。是に於て新に神廟を明殿の域に興し、親ら齊しく頌を進む。」と述べてゐる。これは遼の太宗が、東大神族を往古の姿に復興せんとする雄志を叙したものである。茲に神子「奇契丹燕」は炎帝なりと述べてゐる。炎帝は支那古代神話に於ける神農氏であり、「火の神」である。

わが神典に據れば火の神たる燿土之尊は、伊邪那岐伊邪那美命の御子であつた。このことは、契丹民族の祖先が、日本神族の子孫であるといふ一つの示唆を與ふる。

或る太古史の文獻に據ると、鶴草蒸不合第五十八代御中主幸玉天皇（紀元前四二三年御即位）

の朝に、アジチからシナ王の伏羲と神皇とが渡來し、三十六年間、北陸伏氏木水門に滞在して惟神の大道を研究したが、歸國に際して、天皇より「天津金木」を賜はつた。伏羲は此れから易の八卦を考案したとある。易經が我國の皇道の註釋となつてゐるのはこれが爲である。

このやうに觀て來ると、支那の古代民族は、日本神族と深い關係があり、支那古代民族は日本から分派して行つた民族であるやうに思はれる。それ等の古民族が持つてゐた文化が支那文化の源泉である。

周書の呂刑篇に、「昔し苗民が五刑を制して無辜の人民を虐げたので、人民がこれを上帝に訴へると、上帝は人民が罪なくして虐待されてゐることを、不憫に思召されて、重黎に命じて地天の通路を絶つて苗民を抑壓せしめた。」といふ神話が記載されてゐる。楚の昭王もかつて此の神話を引用して、昔の人は天に登り得たのであらうかと疑つたといふことであるが、此の神話に語られてゐる「天」は、彼等の民族祖の發生の源、即ち天帝に外ならず、天の國は實に我が日本のことであつて、この上帝こそは、日本の「すめらみこと」であつたのではないかと信ぜられる。

「契丹古傳」の傳ふる東大神族を、一般東洋史上にあらはるゝ北狄種族となしても、それは所

謂トルコ族、蒙古族、通古斯族を包含し、之等種族の居住した地域は、東は日本海より、西はフィンランドに及び、南はトルコ、更に現在のハンガリーも此の種族に含まれるのであつて、揚子江畔を除く以外の北部亞細亞全土を掩ふのである。漢民族の起源は、今日尙決定されてゐない。或ひは埃及から、或ひは印度から來たものとも云はれ、大體中央亞細亞方面が其の發生の故地とされてゐる。彼等が日本民族と直接關係のあつたと推量さるゝ、東大神族の一派であつたか否かは、今日尙知る由もないが、たとひ然らずとするも、黃河畔に移住して來た前後に於ては、東大神族と思惟される種族と混合し、或ひは其の文化を繼承したことは確實である。彼等の古代神話乃至は、古典の傳ふるところから判斷すれば、既に易や王道に關して述べた如く、彼等も亦「天孫」を太古に於て君主として仰いでゐたのであつた。

我々は此等を綜合して、太古に於ては、今日の支那大陸、否亞細亞の全大陸が、實にわが「すめらみこと」によつて統べ治められてゐたのではないかと考へるのである。果して然りとすれば、今日云はれる東亞共榮團の建設なるものは、太古に於ける亞細亞の姿、即ち 天皇を中心とする亞細亞一家體制を、現代に於て復活還元することに外ならない。

神代文字

山鹿素行の神代文字存在論

さて、漢字の渡來以前に、我國に固有の文字があつたか否かは、實に今日に於ける重大なる文化問題である。從來多くの學者は、古語拾遺の卷頭に「蓋し聞く、上古の世未だ文字有らず」とあるのを唯一の根據として、我國には固有の神代文字なしと早斷して來た。しかしこれは極めて大膽なる臆説であると思ふ。

山鹿素行は「中朝事實」に於て、日本書紀卷廿二を引用して、

「廿八年（推古天皇治世）皇太子、嶋の臣と共に議りて天皇記及國記、臣・連・伴造・國造、百八十部・併せて公おほんたから民等の本記を録したまふ。

謹みて按ずるに、是れ皇記・國記・本記を爲るの始なり。孝德帝の四年、鞍作くらつくり（蘇我入鹿）が事ありて、父の蘇我臣蝦夷誅に臨みて悉く 天皇記・國記を燒く、船史ふねのふし惠尺、即ち疾く燒かるゝところの國記を取りて中ノ大兄に奉る。この時往古の典籍悉く燒失す。其の後 天武帝群

の如く、一音一字の音標文字であつて、一つの言葉で多くの意味を含み、深淵しんえんな意義を持つてゐるものが多いので、この場合はどういふ意味であるといふことを、わかり易くするために、漢字を大和言葉の傍にフリカナ的に書いたものであると云ふ。しかるにそれが、いつしか今日のやうな逆の状態になつた。忌部正通はこのことを言つてゐるのである。

かなは、田多井氏によると、漢字から吉備眞備が創作したものではなく、彼は單に數種にわたる神代文字を整理したにすぎず、それも甚だ不完全な整理の仕方であり、神代からの正しい音と形とを共に崩くづしてしまつた。神代文字ではア行のイ、エとヤ行のイエは同じものでなく、又ア行のウと、ワ行のウとも、悉く字體を異にし發音も異なるものであつた。

片假名といふのは間違ひで、「象形神字」でなければならぬのである。カナと呼ばれる言葉は古くは單にナと呼び、後世之れに字と云ふ漢字をあてたものである。日本書紀欽明天皇記に「帝王スサノヲ氏紀に多に古き字あり。撰イテ集之人ウツク屢遷ウツク易カを経たり。後の人、習ひ讀みを、意を以て刊イテり改め傳へ寫すこと既に多く遂に舛ウツクひ雜ウツクふことを致せり。前後序を失ひ兄弟參差なり。今則ち古今を考へ綴イテりて其眞正に歸す……」とある。同じく天武天皇記によると、「丙午、境部連石積等に命せて更に釐イテめ新字一部四十四卷を造らしむ」とある文書中の「字」とあるの

がそれである。カナのカは神であつて、カナとは「神字」の意味である。そしてカタは象形の義である。神代文字のうち象形的のものを簡易し、前記欽明天皇記にあるやうに、後世神代文字の各種の系統が入りこんで亂れてしまつたのを整理したのがカタカナである。ヒラカナは漢字の崩し字と云はれてゐるが、實はさうでなく、之も日族神字の意である。神代文字の一種に天日靈神字アマノヒノミコノカタと云ふのがあるが、之れの崩し字として單體の神字があつた。之は今日、神社の御守札、御神符、其他神社關係の文獻中に、最も廣く發見される系統の文字である。これが後世ヒラカナとして整理されたものであるといふ。

神代文字と皇國が萬國の親國なる事實

今日すでに發見されてゐる神代文字は、其の種類百數十種に達する。現在伊勢神宮の文庫に所藏されてゐる神代文字でさへも九十數種類に及んでゐる。各地の由緒ある神社の御守札には、たいして神代文字が記されてゐる。又壁や岩窟等にも、屢々神代文字の刻されたものが發見されてゐる。九鬼子爵家には相當種類の神代文字が藏されて居り、宇佐八幡の社家には、未だよく研究されていない數十種の神代文字があると云はれる。茨城縣磯原の武内家には、極めて多くの神代文字がある。これにはすべて、作成された時代と、作成されたスメラミコトの御名前が附記

されており、皆アイウエオ五十音に排列されてゐる。そしてこれらは、イムベモジ、アメコシネモジ、アヒルモジ、コレタリモジ、ユヒナワモジ、スメルモジ、モリウネモジ、等其の種類に従つて名前があり、時代的に變遷してゆく系統がすべて知られるのである。田多井氏の研究によると、アイウエオ五十音の組織發展は、宇宙天地間の諸物生成化育の組織發展と其の換を一にするものである。それ故に日本の言葉を言靈と云ふのである。氏はアイウエオの五音は、變て陰陽に割れて發展する原動力を表現した原音であると解釋して居られる。

さて、此等の神代文字の研究によると、皇國こそは、實に世界諸民族の有する文字の本源地であつて、これによつてもまた世界人類は、日本より發祥して分派せるものであり、天皇は生命的に世界人類の大御親であらせられ、上古に於ては、世界の諸國が、天皇にまつるひ奉つて、眞に世界一家體制を營んでゐたことが理解されるのである。

從來我國の學者の大部分は、近代西歐學說の奴隸的信奉者であつて、始めから日本民族が外來民族であるといふ臆斷に陥つてゐる。例へば日本民族は猶太人の一支派であるとか、或はツングースの一派が、朝鮮半島を経て移住して來たものであるとか、或ひは小亞細亞のスメル民族が渡來して來たものである、といふ風に説いてゐる。然し此等の極めて大膽なる臆説は、多

田井氏或ひは吉田兼吉氏等の如きすぐれた神代文字研究家の事實に即する究明によつて、根本的にくつがへされんとしてゐることは、現下の世界史の變轉と思ひ合せて、まことに興味深く、また痛快なことである。

昭和九年の春、南米ボリヅイアのインカ帝國の遺跡から、人形を象つた太古の遺物が發掘された。それには不可解な或種の文字が十六字刻まれてあつた。しかしそれが、如何にも東洋の文字らしいので、發掘者はそれをボリヅイア駐在の矢野公使の宅へ持参した。同公使は之を外務省に送附してきた。外務省は早速北京大學の人類學と考古學の研究室に送つて、その鑑定を求めたが、此の方面の専門家は遂に之を理解することが出来なかつた。然るに或神代文字の研究家が、偶然それを觀て讀破したのである。即ちこれは、我國の神代文字のうち「天越根文字」と呼ばれるものであつたことが確認された。更に、エジプトのピラミッドから出た或る粘土板の古代文字が、吉田氏の非常な努力によつて、我國の神代文字であると云ふことが證據立てられた。この神代文字は、「結繩文字」と、「すめる文字」であつて、竹内文獻に因ると、太古に於て我國で創造せられたものである。此の古代文を解讀すると、「日本から天降つた二柱の神の靈が靈のピラミッドに納められてゐる。代々その子孫が伸び榮えることを祈る」といふので

あつた。

今日世界最古の文字とされてゐるものは、紐育のヂェエネラル・セオロジカル・セミラリに蔵する「ホフマン文書」と稱されるもので、これはバビロニアで發掘された約七千年前のものである。これに記された文字が、わが竹内文獻中に存在する各種の神代文字の中に、五十音全部そろつて存するのである。この文字は、世界の學者が未だ解讀し得なかつたものである。

先に述べた殷の虚書、即ち骨片にしるされた文字は、支那に於ては羅振玉氏が數十年にわたリ研究し、やうやくその一部を解讀したが、此等の文字は、皆我が神代文字である。骨片は既に二萬點以上に登り、それに刻まれた文字も亦數種類の系統に分れてゐる。ところが、我が古文書に誌されてゐる神代文字の中に、すべて同一のものが存在する。この事實は、太古の支那が、日本から分派した枝國であつたと云ふことを裏書するものである。支那とは枝那即「エダナ」の意味であると云はれてゐる。

更にまた、最近無錫の特務機關長小松潤三中佐が、吉田氏の處へ、蘇州寒山寺附近の西園寺に所藏されてあつた、漢字起源の資料の寫しを送つて來た。處が、よく調べてみると、此等の漢字の原型は、我國の神代文字であることが立派に證明された。「中國文字之起源構造」なる

書物を讀むと、漢字の字源の大半は、我國の神代文字であることが判明する。「上記」によると、神武天皇以前六十七代前の天皇の御代に、日本から支那に文字を傳へた記事がある。我國の古代秘史によると、亞細亞大陸のことをアジチエダグニと呼んでゐる。アジチと云ふ言葉は、現在石川縣富山縣地方で使用され、それは分家のことである。支那といふ文字は日本で作られた文字であるが、これは枝那より轉化したものである。太古に於ては、支那は、日本の枝國であつたのである。

歐洲文明の源流をなし、その發生地であるとされてゐるテグリス、ユフフラテス兩河畔の地バビロニアの文明は、スメル人によつて創始されたものである。しかるにスメル人は、何處から派生してきたものか、現在尙不明なのである。マツケンジー著の「バビロニア及アツシリアの神話」は、スメル人の建設したバビロニア文化（歐洲文明の原始形態）が獨特のものではなく、更に太古の淵源から派生したものであることを承認してゐる。ところが我國の太古秘史によると、スメル人は、スメラミクニ即ち、日本から小亞細亞地方に移住した大和民族の一派であつて、彼等は順次にクサビ文字、クニハ文字、ハヒロ文字等の我が神代文字を彼地に傳へたといふのである。これは今より約五萬年以前と推定される。このクサビ文字は、初期スメル文

化の基礎となつた。西紀前八世紀頃に、バビロニア王ナブパラチンがツツバル市のシヤマシユ神宮に奉納した額が發掘されたが、その額に刻まれてある日の神シヤマシユの腰掛は、繪畫又は模様如きハヒロ文字中のウの字であり、西紀前六世紀頃の作であると云はれてゐる日の神マルツークの塚にも、亦ハヒロ文字が刻まれてゐる。これ等の實例から見ると、燦然たるバビロニア文化は、實に太古の日本より渡來し行つたものである。勿論その詳細は、尙將來の徹底的な科學的調査に俟たねばならぬ。

埃及の古代象形文字も亦我國の神代文字の中に、其の系統を見出すのである。これは「スメル文字」や「結繩文字」に屬する。又これらより轉形して行つたものもある。更に驚くべきことは、埃及のピラミッドが、天照大神を御祭した祭壇であつたと云ふ説が有力となりつゝあることである。

其他尙幾多の示唆に富む事實があるが、此等を綜合すると、神代文字の研究は、日本が太古に於て世界の親國であつて、人類發祥の聖地なることを證明するものである。

神代文字は僞作に非ず

最近我國の各地に於て發見される各種の神代文字は、其の組織の整然たることその種類の多様なること、到底之を單なる僞作と見

ることが出来ない。ひらかなの始源と云はれる阿比留神字を取つてみても、多くの學者は之を朝鮮の諺文を眞似て後世僞作されたものであると早断してゐる。阿比留神字は神社の神寶に刻まれ、或ひは御札等に書かれてゐる。

然るに朝鮮の諺文は、李朝の世宗の時代、即ち今より約五百年前に諺文廳といふものが設けられ、申高靈、成三問等の學者に命じて作成せしめたものである、と備齋叢話に誌されてゐる。それは皇紀二千七十年頃のことである。然るに卜部兼方著の釋日本記の中には、既にこのアヒルカナの草體文字が記されてゐる。これは紀元千九百六十一年に著はされたものであるから、朝鮮の諺文が製作された以前、約百十年も遡るのである否それよりも更に、五百年前に當る紀元千四百九年、則ち 孝謙天皇の天平勝寶元年に出來た聖田賣買證書に奥書した伊賀阿舛郡柘植郷長椋井磨の印願文字が、アヒルカナの崩し字であり、此文獻は奈良東大寺新造文庫に所藏され、此文獻を収録した觀古雜帖は現在宮内省の圖書寮に保藏されてゐる。これを以て見れば、朝鮮の諺文の方が却つて我國の神代文字を眞似て製作されたものと言ひ得る。

太古文獻にあらはれた世界一家體制の事實

太古文獻は何故秘匿されてきたか

それでは抑々、何が故に全人類の大祖國たる我國の完全なる神代史と、更にそれと密接不可分の關係を有する太古の萬國史が現在まで隠されてゐたのか、又それを科學的に證明し得るところの神代文字の研究が、何故殆ど爲されなかつたのであるか。それは主として我國史上、最も遺憾と思はれる蘇我・物部兩家の鬭争に起因してゐるのである。

即ち崇佛派の蘇我馬子が、排佛派の物部守屋を攻め亡ぼした爲に、爾後我國の政治と文化とは、佛教徒の手に移り、惟神の歴史的傳統は、彼等によつて迫害され、燬滅改竄されたのである。

當時、日本正史は勿論、神社の神代にして抹殺盜壞されたものが頗る多かつた。このことは、兵庫縣明石の九鬼子爵家に傳はる古文獻にも記されてゐる。九鬼家は朝廷の神祇を掌つてゐた中臣家の直系であつて、中臣家は、其後に鎌足によつて中興せられ、藤原氏を稱した。藤原氏

は一條九條・大中臣・九鬼等に岐れた。九鬼家は吉野朝時代に熊野神社の別當に補せられ、長らく熊野にかくれ、太古の貴重なる史實を守護して來たのである。又竹内宿禰の子孫なる竹内家は、越中に隠れて代々古代文獻を守つてゐた。元來蘇我氏も竹内宿禰の子孫に當るのであるが、蘇我石川麿の子滿知に嗣子なく、百濟王淋聖太子の孫に當る韓子カウコを養子にしたのである。それが爲その子孫たる馬子や蝦夷、入鹿等には歸化人の精神が流れ、驕慢の結果は遂に朝廷を蔑視し、日本の正史を燬滅せんとするに至つたのである。物部家は最も迫害を受けたのであるが、其の子孫は東北に落ちのび、現在秋田縣の羽後境にある唐松神社の官司として榮えてゐる。こゝには貴重なる神代古文獻、就中神代文字で記された物部家秘傳の天津祝詞アマツノイハヒが寶藏されてゐる。

現在皇國は、外來の「法治國家體制」より本來の「祭政一致國家體制」に復活せんとしてゐるが、この際太古に於ける皇國神政を明らかにする重要なる古文書が各所に發見されてゐるところは、全く御神慮としか思はれぬ。まことに現在の宇宙的變轉は、人智の窺知し得るところではない。敬虔なる宗教的信念ある者のみがこの深き意義を把握し得るのである。

太古文獻にあらはれた太古の世界

此等の古文獻によると、神武天皇以前にウガヤフキアヘズ朝七十三代が続いてゐる。これは以上の諸神代文獻に於て殆ど一致してゐる。當時は「世」と「代」とを區別し、御同名の神皇が數世續いて、一代を爲して居られたやうである。

而して日本は、實に宇宙開闢以來、連綿として世界人類の生命的中心であり、日本と諸外國との關係は、「親國」と、それより派生した枝國たる「子國」との關係であつた。わが天皇は、萬邦の人々がみな心から歸一し得る家長の地位にあらせられた。即ち天皇は、絶對的な生命的秩序の下に、世界萬國をして皆其の所を得せしめて居られた。萬邦の人類はその皮膚眼毛の色合によつて五つに分れ、五色人と呼ばれてゐた。而して太古の世界は日本であり、天國である皇國を中心として、アチチ枝國（アジヤ）ヨモツ國（亞細亞の西部即ヨーロッパ）アフリ（アフリカ）オイスト（濠洲）ヒウケエビルス（北米）ヒナケエビルス（南米）ミヨイ、及びタミアラヒから構成せられてゐた。然るに其後、地球上の大變動により、ミヨイとタミアラヒは海中に陥没したのである。此のミヨイが、先に述べたチャーチワード大佐のミュウ大陸と符節を合することは注目すべきことである。チャーチワードはミュウを以て人類の祖國とした

が、それは皇國の枝國の一つに過ぎないのである。

ところで、地球には、幾度も大變動があつた。これは今日の地質學が證明してゐる。我が太古秘史にも、地球は幾度となく泥海になつたことが記されてゐる。舊約聖書に記されたノアの洪水もその一つであらう。本來地球は火熱の塊であつて、その中心部程熱度が高い。處が此の地熱が爆發して海中に放出したときには、夥しい水蒸氣を發生せしめた。それは上空から冷却した地面に下り、氷河となつたのである。地球の一部が非常に熱すると、その反對の部分が急に冷却する。こゝに古代に於て、屢々地球を覆ふた氷河時代現出の原因がある。かゝる噴火激震、乃至は氷河の襲來の連続によつて、人類は度々悲惨なる境遇に置かれ、文化はその度毎に破壊された。又陸地の變化も行はれ、地球はその相貌を今日の如く變へたのである。此の氷河が融けて生じたものがノアの洪水であらう。しかし日本は幸にも灼熱せる地殼の割目、即ち海溝より遠い爲に、地表もたいして冷却しなかつた。今日火山の多いのはそれによると思はれるが、そのために日本に降つた水蒸氣は、冷却して氷河とならず、かへつて蒸雨となつて、動植物其他凡ゆるものゝ生成發展を助長し、又之を食物として人間も生成發展したものと思ふ。日本の古典や祝詞に、「天の益人」といふ言葉があるが、それはこのことを意味したものであら

斯の如き原因によつて、日本神族は悠久なる天地開闢の當初より今日迄、斷絶することなく、其儘天壤無窮に發展して來たのである。従つて其の歴史は、最も古く、又最も正しいのである。他の如何なる國にも残つてゐない太古の文獻の存在するのも此の故であらう。諸外國は、かゝる天變地異によつて、屢々崩壊し、遂に親國との關係を斷絶され、人々は生命の源流を忘却してしまつたのである。

八紘爲宇は太古世界一家體制への復源

西曆千二百八十年に出版されたヒリフォードの世界地圖をみると、東が上になつてゐるのみならず、印度の先で、恰度日本に當る處が「天國」と記されてゐる。しかも此の世界地圖は、我國の中國學校で一般に用ひられてゐる附圖の一つになつてゐるのである。果して然らば、今日「西洋人」が超越的にのみに想像してゐる「天國」は、實の所日本であつたのではないかと思はれる。恐らく太古に於ては、日本から分岐した萬國の人々、即ち五色人は皆「すめらみこと」のましましたスメラミクニが、「天國」であると信じ、又その間には常に交通があつたものと想像される。太古に於ては、あめのとりふね天皇は天鳥船によつて世界萬國を巡遊されたとわが太古秘史は述べて

ある。御即位の大禮には、五色人の代表者が我國に集まり、之に參列奉賀したといふ。

しかるに其後地球上に、恐るべき大變動が幾度となく發生し、それが爲に各國はちりぢりばらばらになつて、親國と子國との生命的關係が失はれてしまつたと信ずる。しかし彼等は、子國として彼等の生命の元である親國を慕ふ情には變りがないのである。そこでその悶々の情を慰すために止むを得ず、超越的な天國や神を想定して、所謂既成宗教を創始したものと思はれる。

従つて若し科學的に、考古學的に、又史實的に、日本が全人類の發祥地であり、現人神が、彼等の生命祖であらせられることがわかれば、彼等は忽ち宇宙の眞理を悟り、初めて安心立命し、その所を得るであらう。而して多くの子國は、皆一つの親國に心から歸一し、坤輿は茲に一字となり、人類は最早戦争により流血の慘をくりかへす必要がなくなると信ずるのである。神武天皇が八紘爲宇の御大詔を賜はり

天業ヲ恢弘シテ天下ニ光宅スルニ足りヌヘシ

と仰せられたのは、地球の大變動によつて破壊された太古の世界一家族制を、再び復活せんと念願遊ばされたものに外ならぬと思はれる。されば親國と子國との生命的關係を、太古のあり

し姿にかへすことが本當の「八紘爲宇」である。

「天業」の恢弘とは、世界萬國を神代のありし姿に還元し、親國であり、天國である日本を、絶對的中心として、之に凡ての五色人を歸一せしめ、全人類一家體制を再建することである。

將來は全個一體の「生命論理」たる「惟神の大道」が、歐米流の形式論理に代つて新世紀の世界普遍原理となるものと信するのである。元來「形式論理」なるものは、共同の親國が存在してゐることを忘却して、相互に孤立對立する多くの子國の間に行はれる思考形式なのである。しかも基督教の聖典であるバイブルの使徒行傳第十七章には、

「この神は凡ての民を一つの血より造り、悉く地の全面に住ませ、豫めその時と住む所の界とを定め給へり。こは人をして神を求めしめ、彼等が或ひはさぐり得ることあらんが爲なり」

と述べてある。此の言葉は實に意味深長であつて、日本が全人類の祖國であり、「すめらみこと」が全人類の仰ぐべき神人であらせられることの證左になるのではないかと思はれる。我國の神典は勿論、バイブルも佛典もコーランも、全人類の親國としての皇國の本質を明らかにする文獻であると思はれる。

九鬼家に傳はる古文書には、次の如き驚く可き記事が載つてゐる。素戔嗚尊の御子に天佐登美命といふ御方がおいでになり、又の名を小男登美命、又白人根命と申上げる。其の御子が野安押別命であつて、これが舊約聖書に出てくるノアであると云ふ。野安押別命の子孫に宇宙世と伊惠須が出てくる。

「創世記」の第六章第四節に

「其のころ地にネフィリムありき、亦その後神の子たち、人の娘に入りて子を生ましめたりしが、其れ等も勇士にして古の名聲ある人なりき。」と記してゐる。

ネフィリムは巨人的英雄であるが、之を先に記述した東大神族と解釋することは決して無理ではない。「ネフィリム」の「ネ」は大和言葉の根であり、フィリムはラテン語の「子供」と云ふ意味に當る。つまりネフィリムとは「根の國の子供達」と云ふことになる。古代の日本語とラテン語の組合せは、必ずしも不思議ではない。太古には斯の如き例がある。亦「神の子」が娘達のところに入婿して子女を生ませたとあるが、彼等を素戔嗚尊の後裔であると解すれば辻褄が合ふ。記紀によれば素戔嗚命は「根の國」に赴かれたのである。それから舊約聖書によ

れば、ノアの三子がセム・ハム・ヤベテである。而してセム人の子孫がセミテツクで、猶太人はセム種族に属する民族である。さうすると猶太人も古代日本民族の分派であると思はれる。舊約聖書の初めの創世記第十四章第十八節以下にメルキゼデツク (Melchizedek) と名づくる最高神が現はれて来る。此のメルキゼデツクの「メルク」は、ヘブライ語で王、「キゼデツク」は正義の意味である。而して聖書を讀むと、メルキゼデツクは猶太人でないことがわかる。しかも此の至高神は、天上神であると共に地上の主権者でもある。即ち「現人神」としての性格を持つてゐる。新約聖書ヘブリウ書の第七章第三節は、メルキゼデツクのことを「父なく母なく系圖なく齡の初めなく生命の終りなく、神の如くにして限りなく祭司たり」と記してゐる。これは萬世一系天壤無窮に祭政一致のまつりごとを行はれる 天皇を暗示してゐるものである。三浦關造氏の研究に據れば、エホヴァなる猶太の神は、ギリシア哲學を研究した猶太の學者が捏造した、架空の神であつて、眞に猶太人等が信仰してゐた最高至上神は、メルキゼデツク以外にはなかつたことである。三浦氏は端的に、メルキゼデツクは我が太古時代に於ける 天 皇であると、論斷してゐる。これ等の點は將來世界的規模に於て徹底的に研究せらるべき問題である。

太古文獻出現の現代的意義

以上に述べ来たつた太古文獻の記録は、今日の淺薄なる合理主義的頭腦で考へると、全く荒唐無稽に等しきものであらう。然し乍らこれら文獻の根底に於て一貫してゐるのは、皇國が萬國の親國であるといふ主張である。これは今日深く考へなければならぬ大問題である。況んや、科學的にも之を承認せざるを得ない事實が多々あるのである。

我等はこれを以て、愈々皇國推神の大道の神祕的深淵を感得し、更に強く皇國の大使命を自覺し、天業翼賛の熱意に燃えなければならぬのである。

古來我が國は「神國」と呼ばれて来たにも拘はらず、人々は僅かに三千年の歴史を以て之を萬國に誇つて来たのである。三千年と云へば、亞細亞に於ては周の時代、歐羅巴に於てはローマの時代に留るに過ぎない。それ以前の日本歴史は所謂、「神代」として敬遠的に取り扱はれ、總てが幽玄なる神祕に包まれ、漠として捕足し難いものであつた。

然るに八紘爲宇の大理想が國民の絶對的信念となるに伴ひ、此の數年來不思議にも、太古神代の基本相を闡明する諸文獻が國の内外に於て現はれつゝあることは、世界新秩序建設へと驚く可き速度をもつて進みつゝある時代の變轉と思ひ合はせて、深き神意の開顯とも感得される

のである。

此等太古の秘史を総合してみると、古代に於て我が天皇は、實際に全人類の統治者であらせられ、「五色人」と稱せられた世界諸民族をして皆其の所を得せしめ、彼等の生成化育に慈愛の大御心を注がれてゐた。然るに其後、地球上に大規模なる震災・火山の爆發、洪水等が續發して、其の結果天皇を中心とする世界の一家體制が壊滅に歸してしまつた。斯くて「親國」日本と、「子國」若くは枝國たる世界萬國との生命的連絡が杜絶して、全世界はたゞよへる國の状態に陥つて了つた。併しながら造物主の御直系として全人類の平和と幸福と繁榮の保證を「天職」と信じ給ふ天皇は、痛く宸襟を憫ませられ、此のたゞよへる國を修理固成して、地上を嘗て在りし姿に復歸せしめ、人類をして再びその塔に安んぜしむべく天業の恢弘を念願し給ふたのである。即ち神武天皇は日本を世界の中心となし、再び全人類を八紘一宇の一家體制を繼承せられ、天業恢弘に御精進遊ばされ、また日本國民の血の中にも我國は、神國にして萬の國にすぐれた親國であるとの信念が底深く脈々として流れて來たのである。

しかし乍ら、生命の源より切り離された世界は、却つて愈々末世の形相を呈し、惟神の大道

は次第に没却されて、個人主義、自由主義、資本主義、社會主義、マルクシズム等の如く、宇宙の絶對的眞理に逆行する不純分裂思想が世界を風靡するに至つた。斯くて世界は、彼等の生命の本源たる祖國日本の存在を忘却して、相互に淺間しき争鬭を續けて、今日に至つたのである。而もその極まるところ、遂に木に歸るの神機が到來したのである。

即ち滿洲事變を發端として東西に勃發した世紀の大戦争は、道義的なる世界新秩序建設を理想とし、生命の中心を見失つて支離滅裂に陥つた全人類をして、再び、八紘爲宇の世界一家體制の再建に向はしむるものである。

就中、皇國と理想を同じくする獨伊兩國は、世界人類の大御親としての天皇の御本質を臆氣ながらも理解して、天業に參與せんとしてゐる。大東亞戦争の勃發と英米の敗退とは、我々の此の信念をいやが上にも鞏固ならしめる。

既に述べた如く西洋語で「民族」を意味する nation と云ふ言葉は、「生れて來たもの」と云ふ意であつた。個人主義文明に行き詰つた世界は、今日民族の生命にかへり、こゝより人生を根本的に新しく見なほし考へなほさんとする氣運に向ひつゝある。即ち「生れて來たもの」——民族——の再検討は、當然「生み出したもの」の検討へと進む。獨逸に於ける民族への復

歸運動は、ナチスの青年をして基督教を去つて古代ゲルマンの民族宗教に歸依せしめんとする傾向を示しつゝある。而して古代ゲルマンの民族宗教は、既に述べた通り、我が惟神の大道と脈絡するものである。古代ゲルマン人の至高神は「日の神」であり、彼等の民族的祭祀には我が「ひもろぎ」と相似たものがあつた。古代ゲルマン人は印度ゲルマンと呼ばれてゐたのであるから、其の民族生命は東洋に淵源するのである。この點から、或ひはドイツ人と日本人の間には、數萬年の古代に於て、生命的交渉があつたのではないかとも想像される。

何れにしても血潮の流れは、天の運行の旋律と冥合して、全人類をして生命の本源に向つて還元追慕せしめる、既に十九世紀的な合理主義の時代は去つて、一種の神祕的靈覺が、現代人の腦裡に復活しつゝあるのである。今日神代への追憶ノスタルジアとも云ふべき深き宗教的情操が、新興知識層を動かしてゐることは驚くべき精神的現象であると云はねばならぬ。

六 大東亞皇化圈一家體制の建設

英米の東亞侵略

西歷一七八九年の佛蘭西革命に發する西洋近代の自由主義と資本主義とは、英米佛に於て華々しく開花した。此の西歐近代思想は、英米の世界支配と共に、又それに先行しつゝ世界のあらゆる國々の所謂「インテリ層」の中に、深く浸透して行つたのである。亞細亞も亦その例に洩れなかつた。

第十八世紀に於て英國に起つた産業革命は、急速に機械の發明を促し、多量にして且つ安價な機械工業品が生産された。そこに近代資本主義は生れ、工業社會が形成され、商工中心の經濟體制となつて現はれた。國民の生活は舊來の封建的自給自足經濟より一轉し、土を離れて、資本、機械に支配さるゝ黄金萬能の物質文明の世界に突入したのである。機械工業の發展は生産過剩、資源不足、失業者の發生を促し、それは當然原料供給地としての又自國工業生産品に

よる暴利獲得の基地としての植民地市場を要求した。かくして列強の植民地獲得を目的とする帝國主義的侵略が開始されたのである。

かかる傾向は、産業革命の發祥地たる英國に於て最も甚しかつた。英國はかかる國內の經濟的要求に加へて、生來の海賊的性格を露骨に發揮し、自由通商貿易の假面の下に、平安の夢圓かなりし亞細亞の、天産豊かな天地に向ひ、暴虐と搾取の貧婪せんらん飽くなき帝國主義を開始したのである。

實に過去四世紀にわたる亞細亞の歴史は、一言にして云へば、歐洲諸國就中英國の東亞侵略史である。人類の歴史初まつて以來、斯くの如く殘忍無道にして、又此の如く徹底的搾取と、暴虐の限りを盡したことは未だ會てなかつたのである。物質至上の經濟第一主義の思想の下に行はれた其のやり方は、冷酷無情至らざるなき有様であつた。

廣大な東印度諸島は、既に和蘭、ポルトガル、及スペインの侵す所となり、佛蘭西も亦之と競争して、佛領印度を蠶食した。英國は、世界の寶庫と稱される印度に上陸して、其の獨立を奪ひ、その無限の資源を掠奪し、印度三億の民衆を動物として取扱ひ、反抗の氣勢を擧ぐる者に對しては無慘なる機銃掃射と爆撃とを以て之に報い、餓死せんとする印度民衆をステツキで

叩きのめした。印度に於て飽滿無限の味を占めた英國人は、更に印度に阿片を栽培して之を支那に賣りこみ、支那民衆から天文學的數字の暴利を捲き上げ、之と共に、支那民衆を阿片毒によつて頹廢無能力化せしめ、以て亞細亞大陸の占據支配を確立せんとしたのである。此の陰險なる英の政策に堪へかねた清國政府は、斷乎阿片の密輸を禁止した。英國は之に云ひがかりをつけて、紀元二千五百年に、天人俱に許さざる阿片戦争を起し、遂に香港を略奪して之をその飽くなき東亞支配の陰謀根據地とした。これより以來一百年、香港は、東亞擾亂、對日壓迫の策源地となつたのである。爾來浸々乎として英國の支那に對する壓迫と支配は進められ、遂に之を「半植民地」と化したのである。

之に遅れて東亞侵略の競争に割り込んだ米國が、嘉永六年ベルリをして軍艦四隻を率ゐて我國を窺はしめたことは周知の事實である。彼が我國を通商上開國せしめると云ふ意思だけで来たものでないことは明らかである。東洋侵略が彼の眞意であつた。然るに日本は容易に武力を以て植民地化することが出来ぬと悟つた米國は、日本の侵略を斷念し、老衰しつゝあつたスペインと戦端を開き、西紀一八九九年、遂にフィリッピン並にグアム島を劫略し、こゝにその野望の一端を遂げたのである。其後も隙を見ては、東洋に於ける門戶開設・機會均等などの美名

の下に、支那大陸に於ける權益擴張に努めて來た。蔣介石への援助は、其の當然の延長であつた。

孫文は、支那より英米の支配的勢力を排除することこそ、支那回生起死の鍵なることを深く認識して、或ひは東京に來たり、或ひは露西亞に頼り、大アジア主義を提唱して、苦心慘情たるものがあつた。

然るに孫文のあとを承けた蔣介石は、英米の魔手に魅了せられ、コミンテルン、人民戦線の策謀に陥入り、ユダヤフリーメイソンの一員となつて、支那を英米ユダヤの植民地たらしむることに汲々としてゐる。即ち英國々籍を有するユダヤ人リース・ロスをして、支那幣制の改革を斷行せしめ、支那の經濟を擧げて英米の帝國主義的支配に委ねたのである。支那が自己の民族生命を保持し、その傳統を復活し、民族本然の姿を顯現して、獨立自主、以て民族の繁榮を招來するの道は、かくして截滅されたのである。蔣介石は、其の師であり、且つは養父である孫文に背き、亞細亞復興の裏切者、亞細亞獅子身中の蟲となつたのである。英米の半植民地と化し去つた蔣介石支那が、英米の野望達成上最大の障害となつてゐた日本に向つて、無道の刃を加へ來たつたのは、之亦當然の成行きであつた。その結果、相共に繁榮すべき亞細亞の二大

民族が相搏つたの悲劇を演ずるに至つたのである。實に憎むべきは英米であり、彼等は天人共に許さざる全アジアの敵である。興亞の理想に燃ゆる我等の同胞兄弟が、英米の彈丸によつて、空しく其のしかばねを、大陸の山野に曝したことが如何に多かつたことか。其の數は實に十數萬に上つたのである。今や、英米打倒環攘の御大詔は煌々として下り、皇軍幾百萬、陸に海に又空に、東亞百年の禍痕を斷乎一掃しつゝあることは、我等の感激措く能はざる處である。

亞細亞の廣大なる地域に於ては、日本を除き、泰・支那の二國がわずかに獨立國としての名目を保ち、他はことごとく、如何なる些少の島々に至るまでも、皆歐米諸國の植民地と化してゐたのが、現在までの亞細亞の悲惨なる姿であつた。泰・支那は、單に形式上の獨立國に過ぎず、實質的には全く、英米の資本に蠶食せられ、半植民地的様相を呈してゐた。我國は、ペルリ來航以來、到底武力を以てしては壓伏し得ざる國であることが判明したので、彼等は手を代へて思想戰、經濟戰によつて、我國を奴隸化すべく全力を傾注して來た。滿洲事變前までは、此の如き英米ユダヤの陰險なる謀略に乗せられ、一時は彼等の思想的奴隸にまで成り下つた觀があつた。現在に於ても、いまだに英米自由主義の迷蒙を拂拭しきれない徒輩が無いでもない。而して決戰體制下に於て、かゝる舊體制的な存在が、朝野の要處に蟠居することは、一刻も許

さるべきことではない。

舊秩序的東亞建設理論

西歐近代思想の強烈なる洗禮を受け、この思想以外に一步も出ることの出来なかつた日支兩國のインテリゲンチヤは、不幸にして極く最近に至るまで、これらのユグヤ思想と、全く範疇を異にする我が國體の本義を把握し得なかつたのである。

西歐近代思想は、「立憲主義」に非ざるものは必ず「專制主義」であり、「自由主義」に非ざるものは必ず「專制主義」であり、「自由主義」に非ざるものは必ず「獨裁主義」であり、平面的な國家聯盟主義に非ざるものは必ず「帝國主義」であり、共產主義に非ざるものは必ず「資本主義」であるといふ、二元主義的對立論に終始する。此の如き思惟の形式から一步も出づることの出来なかつた東亞のインテリ層は、日滿支の三國が、平等の立場に於て提携協力する自由主義的國家聯盟論以外のものは、すべて權益獲得を目的とする帝國主義的意圖であると早斷したのである。是等の論者は稍もすれば皇道の世界光被を以て、恰も帝國主義政策のカモ

フラージュであるかの如くに自卑し、一種の敗戦主義的態度をさへ取つたのである。大東亞の建設理論として世に問はれた諸理論のうちに、所謂國家聯合論と稱されるものがある。之は皇道と王道とを同一視し、日本に於ても皇の字と王の字とが同様に使用されたといふやうなことから、王道を以て東亞復興の指導原理となし、滿洲國を以て日滿支結合の精神的中核となすものがある。これは皇道が、王道とことなる惟神の大道であることを認識せざるものである。また此等の論者は、同志の精神的結合、即ち「強制なき合意」、換言すれば、國際協調主義以外のものはすべて帝國主義であるといふ西洋的ドグマに毒されてゐた。

しかし、我が惟神の大道は、帝國主義にも非ず、又さればと云つて國際協調主義にも非らず、この二つの對立理念を超越した中心分派求心歸一の、絶對的な宇宙生命原理そのものである。

支那の近代知識層に於ても、その大部分が、未だ我國の天皇政治が、歐洲の君權政治と本質を異にする、絶對的親心のスメラ政治なることを知らない。彼等は無批判的に、人類は洪荒時代より神權時代へ、神權時代より君權時代へ、更に君權時代より民權時代へと進歩するものであると云ふ、淺薄皮相なるデモクラシー理論に捉へられてゐる。なるほど近代の西歐に於ては、神權的な中世が崩壊して君主專制主義時代が現出した。而して權力主義を行使した。ロー

ロシアの専制君主は、自己の私利私欲の満足せしむるが爲に人民を勝手氣儘に苛劍誅求し、人民の自由を不當に蹂躪した。そのために、遂に佛蘭西革命やソヴィエツト革命が勃發し、その結果英米佛の如き近代民主主義國家や、ソ聯の如き共產主義的階級國家が成立したのである。不幸にして近代のインテリ層は、大東亞の高貴なる傳統文化をかなぐり棄て、此の特殊なる西歐思想を、宛も人類普遍思想の如くに思ひこんでしまった。我國の大學も、此の如き近代西歐思想の受賣場と化し、惟神の大道に基く學問思想は古きものとして殆どかへりみられなかつた。留日學生が我國の學校で學ぶところは、日本の思想文化に非ずして、西歐のそれであつた。支那其他からの留日學生が、日本の偉大さを認識しなかつた罪の一半は、我國の指導的知識階層の負ふべきものである。

國際文化振興會が、紀元二千六百年奉祝記念事業として募集した日本文化世界懸賞論文中、アジア部の一等に當選した梁盛志氏は、其の論文「日本文化と支那文化」に於て

「明治維新以來、日本の文化は長足の進歩を遂げ、日本文化の支那への逆流といふ事態が出現した。支那譯された日本の單行本は二千種以上にも達し、日本語の語彙は洪水の如く支那に流れ込んだ。言語文章は日本化し、繪畫も日本化した……」

全く幾千百とも知れぬ日本留學出身者は、近代支那の政治や文化の中堅分子となつたのであるから、支那が日本化するのほむしる必然の勢である。支那の建國革命運動は、日本語から重譯された、民権自由思想の影響を受けて起つたものである。

「日本が今日呪咀する所の中國共產黨や共產思想は、支那の土地から生れたものでもなければ、全く蘇聯から輸入されたものでもない。支那に於て逸早くマルキシズム研究會を發起した陳獨秀、季大釗、戴季陶等大部分は、日本留學出身者である。」

「日本は今日では、もはや蘇聯から輸入した唯物思想は清算してゐるが、それが支那に及ぼした餘波は依然滔々として續き、しかもそれは日支關係大破綻の主要不動力となつてゐる。」と述べてゐる。自由主義とマルキシズムとを二つながらに信奉する歐米ユダヤの謀略に乗ぜられ、ひたすらに歐米近代思想の流行を追ひ、自らをかへりみることなかつた日支兩國のインテリ層は今日猛省しなければならぬ。

日支事變一週年に下し賜へる御詔勅に於て

惟フニ今ニシテ積年ノ禍根ヲ斷ツニ非スンハ東亞ノ安定永久ニ得テ望ムヘカラス

と仰せられた。その「積年ノ禍根」とは、主として此半世紀に亘り、東亞を毒して來た歐近

代個人主義思想を指して宜へるものであり、我國民の深く三思すべきところである。現在尙迷蒙醒めぬ支那インテリ層は、わが高貴なる 天皇政治を強いて西歐流の君權政治の範疇はんちゆうにあてはめ

「中華民國成立して十三年、皇帝を推翻たふはして、現在は君權がない。日本は今に至るもなほ君權の國家であり、今に至るもなほ神を拜する。故に日本皇帝をば彼等は皆「天皇」と稱してゐる。支那の皇帝も我等は従前また「天子」と稱して居つた。此の時代に於て、君權が已に發達すること甚だ久しきに、なほ神權を脱離することが出来ぬ。……日本は今に至るも尙君權と神權とを用ひてゐる」

と述べてゐる。これは現に中華民國三十年（昭和十六年）三月、南京政府宣傳部印行にかゝる許錫慶著「中國革命之理論與史實」に掲げられてある文句である。許錫慶は南京政府宣傳部參與であり、此の本には宣傳部長林相生が序文さへ書いてゐるのである。

之は同書第四章民族主義第一節民權の意積の第二神權時代に記述されたものであるが、第四民權時代に於て更に

「何が故に『神權時代には神權を用ひなければならぬか』孫中山先生解釋して曰く『従前は人

類の知識未開で、皇君賢相の指導に頼つて居つた。その時代には、君權は甚だ有用であつた。君權の發生せぬ以前には、聖人は神道を以て教を設け社會を維持した。その時代には神權が亦甚だ有用であつた。現在神權も君權も皆過去の舊跡であつて、民權時代になつてゐる。道理上から論じて究竟何が故に君權に反對し、必ず民權を用ひなければならぬか、近來文明甚だ進歩し人類の知識が甚だ發達し、大に覺醒して居るからである。例へば我等子供の時代には、父母と提携するを要するが、成人して生活し得る様になれば、即ち父母に頼らず、必ず自分で獨立するを要する様なものである。』と。現在民權を主張するのは、一方固より時代の要求に適合する爲であるが、但し同時になほ理論的根據がある。……（中略）政權を掌握する人が「朕即ち國家なり」と云つてはしむ權けんに威福なし、一般人民も亦首を垂れて、其の指揮に従ひ、「普天の下、王土ならざるはなく、率土の濱、王臣に非ざるはなし」とし、政權が漸く個人か、若くは一個人階級に屬する時には、政治は事務を管理するの作用を失つてしまふ。……（中略）……

一切の人類はすべて獨立自由のものである。各個人はすべて自身の獨立自由を有する。何人と雖も制限することを得ぬ。若し政權を一個の君主が之を操れば、彼一人の意志が即ち國家の意思となり、全國大多數の人民はすべて彼一人の意思の支配下に在る。これは大多數の人民の

獨立自由を犠牲にするに異ならぬ。」

以上の文句を讀めば、此の書が自由主義的世界觀に立脚した個人主義的舊秩序の考へ方以外の、何ものでもないことをはつきりと理解するのである。即ち現在の中華民國國民政府の指導的中樞部は、不幸にして依然英米舊思想に囚はれ、その殻に閉ぢこもつて、新世紀の深き意義を自覺して居ないのである。此の如き状態の下に於て、東亞一家體制をきづき、東亞永遠の平和を招來することは、まことに前途遼遠であると云はねばならぬ。

既に述べた如く、自己の私利私慾を達成せんが爲に、權力政治を行ひ、人民を塗炭の苦しみに陥入れた専制君主政治の激烈なる反動として現はれたものが、近代立憲民主主義政治であつた。近代西歐の政治思想によれば、君權は必ず民權によつて打倒せられるといふのが通則となつてゐる。されば思想的修練を缺き、徒に歐米追隨をこれこととせる近代支那インテリ層が、淺薄にも我が 天皇政治を西歐の君權政治の範疇に押し込み、恰もそれが人民の眞の幸福繁榮と兩立すべからざる政治であるかの如くに誤認しつゝあることは、大東亞新秩序建設の途上まことに遺憾の極みである。

他方我國の學界も、個人主義的世界觀に覆はれ、國體に對する熱烈なる宗教的信仰を失ひ、

日本の宇宙觀と、世界觀に基く、學術文化の創設に力を致さなかつたことは全く辯解の餘地がない。

誤れる過去のアジア民族運動と日本の使命

過去四世紀にわたり、歐米の飽くなき搾取と強壓下に呻吟して來た亞細亞諸民族は、英米は強大な國家であり、アジア人は彼等の奴隸的地位に甘んずべきものの如く思ひこむほど無力化せられて來た。此の如き卑屈な心理状態は相當深く、亞細亞民族の根底に潜んでゐる。これは西歐の亞細亞侵略が、其の初期に於てあまりにも無慘激烈を極めたからである。例へばフィリッピンに對するスペインの侵略のあとを見るのに

「食物の缺乏の爲と親や兒に訣れた悲歎の爲とで、囚はれた土人の大部分は死んでしまつた。疲勞の爲に仲間と同じ速さで歩けない奴隸があれば背後から虐殺した。鐵の鎖がその頸や手足を繋りつけた。娘の中で西班牙人の爲に暴行を加へられなかつた者は一人も無かつた。奴隸にされた土人は、總て灼熱した鐵で記號を付けられる。ついで奴隸の一部を隊長が取り、

残り兵卒の間に分配してやる。兵卒は其れを賭けるか西班牙人の移民に賣つて了ふ。商人は此の商品を葡萄酒・麥粉・砂糖・其他日用品と換へて、西班牙植民地の中で最も奴隸の需要がある部分に輸送するのである。」(淺野氏「西洋大歴史」)

また大正八年に行はれた印度アムリツツに於ける大虐殺に就いて、ウイル・デューラントは、其の著「The Crag for India」に次の如く記してゐる。

「ドワイヤー少將は更に數名の印度人を逮捕し、十三日には太鼓を打鳴らして、民衆を呼び集め、通行證を所持せずして市外に去ること、行列を作ること、或ひは三人以上の集團をなすことを禁ずる布告を讀聞かせた。しかるにさういふ布告が出てゐるやうとは全然知らなかつた遠隔の地方から集まつて來た一萬人の印度人は、ヤリアンワラ・バーグと云ふ圍ひ庭に集まつて、宗教的な祭典を執行し始めた。このバーグは、四方高い壁で取圍まれた荒廢した庭園で、狭い入口がある。この集會の報に接したドワイヤー將軍は、ルイス機關銃を裝備した一枝隊を率ゐて、現場に急行した。そしてバーグの中に入り、夥しい群集を認めると、かれ等は自分の命令を犯して集合してゐるのだと断定し、些かの警告も與へず、この集會の平和的目的を釋明する機會をも與へず、矢庭にこの動きのとれぬ群集に向つて發砲を命じた。群集は何等の抵抗をも

なさず、たゞ恐怖と絶望の悲鳴をあげながら、周章狼狽、數箇の出口目掛けて殺到した。將軍は兵の携行した實彈を全部射ち盡すまで射撃を続けさせた。のみならず、かれ自身最もこみ合つてゐる出口に對する射撃を指揮し、照準宜し！ と呼んだ。殺戮は十分間以上續いた。やつと射撃が終つた時、地上に倒れてゐた印度人は千五百人の多數に達し、そのうち四百人は絶命した。ドワイヤーは部下に對して、負傷者に手當をしてやつてはならぬと命令したのみならず、二十四時間の間、一切の印度人の通行を禁止し、親戚や友人たちが、バーグのなかにをり重なつてゐる負傷者のために、一杯の水を持つて行つてやることさへ出來ぬやうにした。」(思想職「吉田三郎著」)

これらは、歐米人の東亞侵略と其の後の植民地支配の様相を物語るほんの一断面に過ぎない。此の如きは、歐米人の侵襲後四世紀の間東亞の天地に於て、常に繰り返して行はれた日常茶飯事であつた。宣戰の御大詔に仰せられたやうに「平和の美名にかくれて」悪虐の限りを盡した彼等の行爲は、實に天人共に許さざるところである。

勿論かゝる暴政に對して、被支配者たる東亞の住民は時に反抗の氣勢をあげた。しかしそれは更にはけしき暴を以て酬いられ、住民の反抗はその度毎に其の無力さを曝露することに終つ

かゝる無益の反抗に對して、一道の光明を與へたものは、實に日露戦争であつた。日露戦争は、世界最大の陸軍國ロシアに對して、東亞の日本が正義の刃をふるつて一擧に之を粉碎した戦である。日露戦争後印度ヒマラヤの奥にまで 明治天皇の御肖像や、乃木大將、東郷大將の額が掲げられたといふ事實は、如何に亞細亞十數億の虐げられた民衆の間に、日本民族の勝利が光明と希望を齎したものであるかを物語る。彼等は同じく亞細亞の民族である日本が、西歐に打ち勝つた事を以て自信を得たのである。西歐の壓政に對する從來の單なる反動的暴動が、民族的色彩を帯び、獨立運動への明瞭なる姿を取つて來たのは實に日露戦争以來であつた。之に力を得た亞細亞民族は、民族的團結の必要を痛感し、民族意識の昂揚に向つて努力しはじめた。かくて亞細亞民族を驅つて、亞細亞解放のスタートを切らしめたものは、實に皇國日本であつたのである。

日露戦争の結果フィリッピンは、當時米國と合併せんとしてゐたのであつたが、急轉直下比島の輿論は獨立への民族運動に轉換した。佛印に於ては安南獨立黨が結成され、蘭印に於てはカルチンの民族獨立啓蒙運動が果敢に展開されることゝなつた。支那に於ては清朝打倒の民族

革命が旗幟を鮮明にし、暹羅は英佛二國よりの侵略によつて亡國の前夜にあつたのであるが、日露戦争による民族意識の昂揚によつて獨立維持への氣力を與へられたのである。

かくして日露戦争後、東亞に於ける民族獨立への氣運は猛然と諸民族の間に擴がつて行つた。併乍ら、これらの獨立運動は、單に素朴なる民族的感情の發露に止まりがちで、民族運動を指導する、明確なる理論は未だ無かつたのである。

第一次世界大戦の結果は英米の大勝に歸し、ウイルソンの「民族自決主義」が世界を風靡した。この理論は忽ち東亞諸民族に獨立運動の指導的理論を與へたのである。彼等は此のスローガンを金科玉條として、民族獨立運動を展開した。

支那に於ける孫文、蔣介石の獨立運動をはじめとして、印度のガンジーや、フィリッピンのケソン、ビルマのウ・ブ、泰のブラジツト等の運動は、此のデモクラシーを基礎とする民族自決主義の影響下に生れたものである。

併乍ら、所謂民族自決主義の思想は、個人主義的自由主義の、デモクラシーを其の基盤とするものである。民族自決主義を主張する限り、結局に於ては其の思想の典型國家たる英米を崇拜する心理を内に養ふに至る。デモクラシー國家に支配されてゐながら、デモクラシーによつ

て其の國から獨立し得るといふのは、惧る可き錯誤であつたのである。見よ、蔣介石は獨立を主張しながら、支那を半植民地化せしめつゝある英米と結託するに至つた。印度は民族獨立の甘言のもとに、世界大戰中三億磅の戦費を英國の爲に醸出し、百三十餘萬の同胞を英國の爲に戦線に送つた。そして英米は、民族自決を宣傳しながら、彼等の希望した獨立は其の片影さへも與へない。「民族自決」は、英米にとつては植民地人を僞瞞し手なづける一箇の方便に過ぎなかつたのである。

被支配民族が、その支配國家の羈絆を脱却する爲には、支配國の支配思想を克服するに足る思想信念を把持してゐなくてはならない。そこで彼等が、支配國をうち破る思想的武器として受入れたものは、マルクス共産主義であつた。印度に於て、ガンヂーに訣別した獨立運動者の中には、左翼思想に走つた者が甚だ多い。ビルマに於て現在第二黨を形成してゐるタキン・パーテイ、更にシン・エタ黨、佛印の越南共産黨、比島に於けるペドロ・アバッド・サントスの社會黨、クリサント・エヴァンヂェリスタの共産黨、支那の中國共産黨等は、其の代表的なものである。

併乍ら此等も、結局英米のデモクラシーより、ソ聯の共産主義へと、馬を牛に乗り替へたの

に過ぎないもので、共産主義は其の理論的必然によつて、彼等によつて立つ民族的立場を抹殺せんとするものである。従つて結局其の翹望する民族獨立は、遂に得られるべくもなかつた。現在までの亞細亞に於ける民族獨立運動は、かゝる指導理念の矛盾に悩み、其の眞の歸趨を見失つてゐたのである。日露戦争によつて彼等をして民族獨立への苦難の道を歩ませしめた日本は、一時何等指導的理念を與ふることなく、自らも英米的デモクラシー思想に塗り潰されてゐた。其の結果、彼等は、日本をも英米と等しく帝國主義國家として眺め、之を憎惡さへするに至つたのであつた。

民族の眞の獨立は、其の「民族本然の姿」にかへり、民族生命の據つて出づる歴史と傳統とを復興し、之によつて、民族の進路を求めてこそ初めて獲得されるのである。かくして獨伊は勃興したのである。日本も亦それによつて甦起しつゝある。即ち皇國惟神の大道に連結し得る民族全體主義の思想によるに非ざれば、彼等の冀求する眞の獨立は決して得られないのである。今や彼等は、騰氣乍らも其の行く可き道を自覺し始めた。泰に於けるビブン首相の運動はま

さに此の如き民族本然の姿にかへらんとするものである。今次の大東亞戰に於て、彼等はいよゝ現實に從來の迷蒙より自覺しつゝある。之を導き、之を助け、彼等を盲目にした西歐近代

個人主義の誤謬を棄てしめ、各民族をして其の本然の姿を追求せしめつゝ、彼等を英米より解放するのは、實に日露戦争以來の日本の責任である。それがためには日本自ら國體の眞姿を顯現し、惟神の大道を明徴にし、政治に、經濟に、文化に、彼等の迷蒙を披くやう親切な教導をなさねばならない。

興亞の指導原理

かしこくも皇國の 天皇政治は、西歐の主觀的專制的なる君主の權力政治と根本的にことなり、極めて嚴肅なる祭政一致の無私の御政治である。それは宇宙自然の大生命的秩序を、そのまま世界の姿に顯現せしめ、萬邦兆民をして、みな其の所を得せしめ給はんとするスメラの政治である。而して我等臣民は、億兆一心全能力を擧げて 天皇に歸一し奉り、天業翼賛に精進するのである。我等は「承詔必謹」この惟神の大道を、大東亞の天地に光被しなければならぬのである。我々から云ふならば、人類が神權時代から民權時代に移行したのは「進歩」でなくしてむしろ「退歩」なのである。それは宇宙の眞生命の中心より離れ去ること益々遠きことを示してゐる。今やかゝる中心よりの分離の傾向が、極點に達し、世界は再び眞の中心、即ち神に歸らんとしつゝある。之は實に宇宙の大轉換期である。今次の大東亞戦争はかゝる神意の開顯に外ならない。此の方向に進む者こそ神命に従ふものであり、將來の榮光を擔ふのである。現に、我が國體原理に隨順して、國家革新を斷行したナチスドイツは、淺薄なる近代の進歩説を信奉して來たフランスをたちまちにして屈服せしめ、ついで同じ思想の系統に屬するソ聯を撃破しつゝあるではないか。これは近代西歐思想が、眞理に背叛するものであることを、事實に依つて證明せるものと云ふべきである。

依然として英米思想より脱却出來ない一部支那インテリ層に迎合し、彼等の共鳴を得るからとの理由によつて、自由主義的國際協調論を以て興亞運動の根本理念となすが如きは、承詔必謹の臣道實踐に反するものと云はねばならぬ。この故に、昭和十六年一月十四日の開議に於て「肇國の精神に反し、皇國の主權を啞眠ならしむる虞れあるが如き國家聯合理論の展開又は斯くの如き國際形態の樹立を促進せんとする運動は之を許さざること」と決定せられたのである。

「平和ノ美名ノ下ニ」實は人類を鬭争と對立に驅りたてる英米個人主義の思想謀略を打破し、

自己の民族的 세계観にかへることが、東亞新秩序建設の不可欠的前提である。我々はもつと堂々と、誠意と、情熱と、固き信念をもつて、東亞の諸民族に惟神の大道を宣布し、これによつてのみ彼等が、眞に其の所を得て幸福を享有し得ることを、彼等に心から理解せしめなければならぬ。知らず知らずの内に自由主義的英米の手先と化した亞細亞のインテリ層が、惟神の大道を把握せずして、それを直ちに帝國主義であるとか、侵略主義であるとか批難してゐるのは苦々しい。しかし、我々は、その批難をおそれてはならぬ。我等は斷乎不退轉の信念を以て、惟神の大道が、人類普遍の絶對唯一の指導原理であることを力強く大膽に、彼等に宣布すべきである。されば翼賛會實踐要綱第五は「文化新體制の建設に協力す。即ち國體精神に基き雄渾高雅明朗にして科學性ある新日本文化を育成し、内は民族精神を振起し、外は大東亞文化の昂揚に努む」

と述べ、國體精神に基く文化建設の要を説き、進んで大東亞文化の昂揚を期してゐるのである。昭和十六年一月十四日の閣議に於て、

「大東亞新秩序建設を目標とする諸國體の指導理念は、昭和十五年十一月三十日、日滿華共同宣言として闡明せられたる主旨に依らしむる如く指導す。」

と決定し、興亞の指導理念を明らかにした。右三國共同宣言に於ては

「……三國相互ニ其ノ本然ノ特質ヲ尊重シ、東亞ニ於テ道義ニ基ク新秩序ヲ建設スルノ共同ノ理想ノ下ニ善隣トシテ緊密ニ相提携シ、以テ東亞ニ於ケル恒久的平和ノ樞軸ヲ形成シ、之ヲ核心トシテ世界全般ノ平和ニ貢獻センコトヲ希望ス」と記されてゐる。

日滿華三國が其の「本然の特質」を尊重し得るが爲には、先づ三國共に其の本然の特質を顯現しなければならぬ。我國に於ては、英米個人主義思想を脱却して、日本民族の特質を顯現し、之を一つの國民運動として組織せんがために、大政翼賛運動が展開された。そして該運動の中核的組織として、大政翼賛會が設置された。滿支に於ても、須く自己本來の民族的特質に復歸すべき國民運動を、更に強力に展開せねばならぬ。若し佛蘭西革命によつて宣言せられた近代西歐思想の支那的表現を以て、自己の指導原理たらしむるが如き不見識な態度を固執する限り、從來の支那に於ける自由主義的な民族自決主義的的民族運動がさうであつたやうに、支那民族本來の特質は發掘出來ないのである。

實際に於ては、既に西歐的なる自由主義とマルクス主義とを清算して、惟神大道に歸つた皇

國が、滿支其他、東亞諸民族に強く働きかけて、彼等を眞心を以て指導するときのみ彼等の特質が眞に顯現されるのである。經典大學に於て、明德を明らかにせる者とは、現實には日本を云ふのであり、その結果新たにせられたもの（新民）は、滿支其他の東亞諸民族なのである。

次に「道義に基く新秩序の建設」とは、當然中心歸一の上下立體的秩序を想定するものである。道義とは何ぞや、と云へば易に於て「天の道を陰陽と云ひ人の道を仁義と謂ふ」と述べてゐる。即ち、天の一陽が人の心にあらはれたものが「仁」であり、天の一陰が人の心にあらはれたものが「義」である。而して一陽は、積極的なる政治指導力を意味し、一陰は消極的なる政治被指導力を意味する。されば道義とは、一陰一陽の道の陰の方面を代表する被指導者が、陽の方面を代表する指導者に心から隨順歸一して、上下立體的動的秩序を作ることなのである。従つて東亞に於ける「道義に基く新秩序」とは、國體精神の東亞に於ける顯現を俟つて、はじめて形成されるものである。

我國に於ては、宇宙根源の中心生命に歸一すること（支那古典の云ふ「明德を明らかにすること」）は、觀念でなくして、「みそぎ」の行事によつて體驗されるのである。その體驗によつて、知行が合一して明德が明らかにされ、宇宙生命と一體なれば、相剋摩擦（さうかくまさつ）の如きは決して起

り得ないのである。眞の大和とは、すべてのものが一つの根源中心生命に歸り、自分達は皆その多くの分體體であると云ふことを自覺し、本來の生命的秩序に心から従ふときに、はじめて實現される。個人主義者が平面的に契約的に相結合しても、決して眞の和は生れて來ないのである。故に日滿支をはじめとし、東亞諸國諸民族が、何れも宇宙根源中心生命たる 天皇に、心から歸一してこそ、眞に其の大和を實現し得るのであつて、此等の諸國が單に條約の上で平面的に結盟しただけでは、永遠的な東亞共榮團は出來上らない。

明德を明らかにした哲人は、さらに進んで新民の指導政治に移行する。新民の過程は齊家・親郷・治國・同盟・平天下である。しかし支那に於ては、此の如き大學の原理を實現すべき不動の中心が存在せぬ爲に、遂に觀念論に終つたのであるが、我國に輸入されて、はじめて實踐的となり、皇道政治の註解として役立つに至つた。

天皇は、齊家の規範として、皇祖皇宗の御遺訓に基づいて皇室典範を制定し給ひ、更に親郷及び治國の規範として憲法・行政法を發布遊ばされ、皇道政治の徹底を圖り給ふた。此の選（えん）きより遠きに及び、内面より外方に展開する皇道政治は、今や親郷・治國の段階より同盟平天下のそれへ飛躍せんとしてゐる。

即ち滿洲國に於ては、既に述べた如く、天照皇大神を建國神廟に奉祀され、惟神の大道を以て國本と奠められた。滿洲國皇帝が、天に則つて王道を行はれると云ふことは、實質具體的に日本天皇の御委任を受けさせられ、日本天皇と一徳一心、以て皇道政治の滿洲國に於ける徹底をはかり給ふことなのである。

此の如くにして萬國の「親國」たる日本を、指導的中心として、滿洲國が之に結ばれ、支那も亦、其の本然の姿にかへることを約して同盟を結び、更に亞細亞の諸國諸民族が其の本然の姿にかへり、民族生命の源頭に趣つて皇國に結ばれ來たり、亞細亞はこゝに「大皇亞共榮團」として再設されんとしてゐるのである。

かくして、惟神の大道を基本として、皇國の指導の下に行はるべき東亞諸國の同盟は、日獨伊三國同盟並に、これの強化として結ばれた三國協約と相連行して、英米ユダヤの舊世界秩序を痕跡なきまでに拂拭しつゝ、やがて世界新秩序の建設、即ち「平天下」にまで擴大強化されてゆくのである。「平天下」とは、皇國の大使命たる「漂へる國を修理固成する」ことであり、親子生命秩序たる大義を八紘に宣揚して、坤輿（世界人類）を天皇のもとに一字（世界一家）たらしむることである。

されば大皇亞共榮團建設の指導理念は、西歐近代の個人主義に非ず、又單に觀念的範圍を出でない王道でも無く、大政翼賛會實踐要綱が示す通り、實に我が惟神の大道でなければならぬ。明治維新に於て、天皇と國民の間に介在せる霸道的な徳川幕府が打倒せられ、天皇政治の確立によつて、はじめて萬民其所を得たるが如く、今日の昭和維新に於ては、天皇と東亞諸民族との間に介在する英米の、幕府的なる文化・政治・經濟勢力が打倒され、天皇政治が全亞細亞に擴充せられることによつて、はじめて、亞細亞の民は皆其所を得るに至るのである。このことは、最早單なる理念ではなく、天運循環して具體的に實現されようとしてゐる。佛人ボーン・リシャールは、大正六年早くも皇國の使命と、亞細亞の運命とを洞察して、其著「告日本國」に於て

「亞細亞諸國は汝（日本）が隔意なきことを知らざるべからず。日本が彼等の微弱に乗じて野望を逞しうするが如きものに非ざるを知らざるべからず。日本が眞の良友にして假面せる敵に非ざるを知らざるべからず。日本が眞に導者にして、偽りの牧者に非ざるを知らざるべからず。日本が彼等の翹望する英雄にして、覆面せる第二の暴君に非ざるを知らざるべからず。諸國若し日本を信せば、諸國は其の全力を擧げて之を日本に獻ぜん。目を擧げて見よ。見て

而して亞細亞が其の信賴するに足ると信するものに獻すべき力を算れ。」
と喝破してゐる。

惟神大道東亞宣布の方策

惟神の大稜威をいたゞく皇軍は、今や東亞に於ける英米の軍事基地を残りなく粉碎し、虐げられし亞細亞十一億の民を英米の鐵鎖より解放し、亞細亞の復活、世界神政復古の天業を翼賛し奉らむと怒濤の進撃を開始した。残された我等の責務は、かくして解放せられた亞細亞民族に對して、如何にして、惟神の大道を理解せしめ、皇威に浴せしめて、眞の世界平和の礎石たらしむるかにある。

我が國體の、如何なるものなるかを充分に辨へざる支那インテリ層、並に佛印・泰・ビルマ・印度・フィリッピン・蘭印等の指導者層に對して、臨機應變緩急其の宜しきを得つゝ、國體原理の浸透を行ふことは、前途甚だ遼遠なる大事業であると共に、刻下切實の急務である。

それには先づ、直接東亞諸民族に接觸すべき日本人が、「四方の海みな同胞」と仰せられて、

絶對慈悲の親心を垂れ給ふ大御心を深く體し奉り、誠と慈愛をもつて彼等を導びかなければならぬ。

明治天皇の御製に

よもの海みなはらからと思ふ世になど波風のたちさはぐらむ
いつくしみあまねかりせばもろこしの野にふす虎もなつかざらめや
へだてなく親しむ世こそ嬉しけれとなりの國も事あらずして
人の世のたゞしき道をひらかなむ虎のすむてふのべのはてまで
國のためあだなす仇はくたくともいつくしむべきことな忘れそ
と仰せられてゐる。

此の廣大無邊なる萬民の大御親としての御仁慈深き大御心を奉體し、海外異民族に對すべき日本國民は、常に、

國と云ふくにの鏡となるばかりみがけますらをやまとだましひ

の御聖旨を奉じ、常に切瑳しつゝ、異民族より滿腹の信賴を得ることが第一の要件である。

それには經濟外交の部面に於ても、我が國體原理が、具體的諸政策の中に常に躍動し、彼等

の信服を得る如く操作されなければならぬ。口に共存共榮を説きつゝ、事實に於て第二の英米たるが如き片鱗を示すならば、惟神大道の大理想は實現し得べくもない。ことに注意すべきは、異民族に接する日本國民が、深き惟神の宗教的情操に徹してゐることである。我々に宗教的情操がなければ、殆ど宗教生活がその全部であり、又根本である東亞諸民族に接觸して、彼等を十分に理解し、且つ彼等を導くことは不可能なのである。これが爲にも國內に於ける國體の明徴、教學の刷新、惟神信仰の涵養が緊要となるのである。

扱て、日滿支の三國同盟は、來たるべき大東亞諸民族同盟の基本をなすものであるが、右三國同盟の基本方針たる「善隣友好」「共同防共」「經濟提携」は、亦わが肇國の精神即ち、惟神の大道によつて正しく解釋されねばならぬ。

右三國同盟の基本方針と密接不可分なるものは、その二ヶ月前の九月二十七日に結ばれた日獨伊三國同盟條約である。その第二條に於て、我國は東亞の指導的地位に立ち、世界新秩序建設に寄與すべきことが約されてゐる。其の成立に際して煥發された御大詔は

大義ヲ八紘ニ宣揚シ坤輿ヲ一字タラシムルハ實ニ皇祖皇宗ノ大訓ニシテ朕カ夙夜眷々措カサル所ナリ

と仰せられ、我國開關以來の世界經綸の根據を瞭らかにし給ふた。又、

惟フニ萬邦ヲシテ其ノ所ヲ得シメ兆民ヲシテ悉ク其ノ堵ニ安ンセシムルハ曠古ノ大業ニシテ前途甚ク遼遠ナリ

爾臣民益々國體ノ觀念ヲ明徴ニシ深ク謀リ遠ク慮リ協心戮力非常ノ時局ヲ克服シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼セヨ

と宣ふてゐる。

此の大御心を世界人類に教傳し、以て世界一家體制を實現することは、實に前途遼遠の大事業なのである。しかもその完遂はたゞ國體の明徴にかゝつてゐるのである。

かくて御詔勅の明らかに示し給ふが如く、我國内のあらゆる方面に於ける國體の明徴こそは、大東亞皇化圖確立の、又それと密接不可分なる、世界新秩序建設の不可缺的前提なのである。

紀元二千六百年式典に賜はりし勅語に於て「惟神ノ大道ヲ中外ニ顯揚」せよと仰せられたことは、既に述べた。大東亞戰爭の開始と共に、全國民は、鐵火のみそぎを受けつゝ、惟神大道への復歸に懸命となりつゝある。しかし過去七十年来培はれ來た英米的思想が、一朝一夕に、あらゆる隱微の點に至るまで剪除されることはすこぶる困難である。

我々は更に深く、己に省みて、神國日本の眞姿を、政治經濟文化等あらゆる國內體制に顯現せしめなければならぬ。

かくしてはじめて大東亞の諸民族は、翕然として皇國の精神的偉大性と、高貴性とを讃仰し、まつろひ來たるであらう。而して後、大東亞は、惟神の大道に基き皇亞細亞として再建され、今次宣戰の御大詔に宣はせられた「東亞永遠ノ平和ヲ確立」するを得るのである。

佐藤信淵の世界皇化方策

本章の終りに於て東亞皇化圈思想の先驅者として、近代日本思想史上に獨特の存在を示した佐藤信淵に就て一言したい。

徳川三百年泰平の夢をむさぼり、奢侈安易の生活に馴れて、雄大なる盛國の大精神をうち忘れてゐた日本は、歐米列強の東侵によつて、中華を誇つてゐた亞細亞の大國支那が、阿片問題を契機として英國の一撃に脆くも敗退して、香港並九龍半島を割讓するや、はじめて時局の重大性を認識して驚愕するに至つた。こゝに於てか幕府當局は、俄かにわが國の周邊に砲臺を築

き、また、各分野に於ける、内政の刷新の缺く可からざることを痛感したのであつた。然乍ら彼等の企圖するところは、外國の攻略侵寇に對する單なる消極的防衛に止まり、何等創造的な經綸の持合せがなかつた。

此の間に處して、佐藤信淵が、皇國古來の大道を闡明し、世界萬國の蒼生を安んずべき大信念を携けて、宇内の「混同祕策」を樹立したことは、わが思想史上まことに一大偉觀と云はねばならぬ。

彼の根本思想は、萬物を生成化育する「産靈」の原理であつて、これによつて萬邦をして各々其の所を得せしめ、兆民をして悉く其の堵に安んぜしめんと念願したのである。

「産靈」に就いて彼は

「最初産靈神が天之御中主神の勅命を奉じてこの天地を造るや、豈にたゞ萬物を育し、人類を撫育するのみならんや。その意は必ず人をして道を修め、徳を積み、神聖ならしめんと欲するなり」

と述べてゐる。彼の思想が如何に雄大であつたかは

「皇大御國は天地の最初に成れる國にして、世界萬國の根本なり。故に良くその根本を經緯

する時は即ち全世界を盡く郡縣となす可く、萬國の君長を臣僕となすべし。」
と云ふ彼の言葉にはつきりとあらはれてゐる。

此の理想を實現するが爲には、彼は先づ強力なる「國防國家」を建設すべきことを主張してゐる。而して自ら兵學を修め、銃器を造り、艦船を工夫したのである。かくて彼は

「天意を奉じて萬國の無道を正すは草昧より皇國の専務なり。こゝに於てか軍を出す」

と論じ、皇國が大義名分を缺く歐米の帝國主義に非ざる事を堂々と宣言し、宇内修理固成の正義の軍隊なる我が皇國建軍の本義を道破してゐるのである。

彼は慧眼にも、我國の地勢が天與の一大防壁を成してゐる事を喝破し

「皇國より外國を征するには、其の勢順にして易く、他國より皇國を寇するには、其の勢逆にして難し。蓋し皇國には天然に世界を混同すべき形勢あるが故なり。故に皇國より世界萬國を混同することは難事に非ざるなり。」

と述べてゐる。まことに信淵は八紘爲宇、天業恢弘の皇國世界使命に對して絶對的なる確信を持つてゐた。

彼が先づ皇道を光被せしめんと欲したのは滿洲である。即ち彼は

「凡そ他邦を經略するの法は、弱にしてとり易きところより始まるを道とす。今に當り世界萬國のうちにて、皇國より征めとり易き土地は支那國の滿洲なり」と述べてゐる。更に續いて

「皇國より滿洲を征するには、これを得るの早晚は知るべからずと雖も、遂に皇國の有とならんことは必定にして疑ひなきものなり。夫れたゞに滿洲を得るのみならず、支那全國の衰微も亦これより始まることにして、即ち樞紐を取得するの上は、朝鮮も支那もつゞいて企つべきなり。然れども、大いに慈徳を施して篤く支那人を撫育すべし。眞に良くこの策を用ゆるならば、十數年にして支那全國悉く平定すべし。その上は更に西域、暹羅、印度支那の國、侏儒鳥舌、衣冠詭異の徒漸々に徳を慕ひ威を畏れ稽顙匍匐して臣僕に隸せざることを得んや。」と彼の大抱負を語つてゐる。

もとより信淵の語調には多少穩當を缺く點が無いでもないが、其の眞意とするところはまさに「東亞皇化國」の確立にあつた。事實彼が豫想せるが如く、日本は滿洲國を建設し、進んで北支より中南支に長驅し、更に南海に國翼を張りつゝある。然も彼の企圖せることは、東亞皇化國の建設に止まらず、更に世界新秩序の建設にまで及んでゐる。即ち云ふ

「子孫永久に能く祖業を擴充し、天意を奉行して間斷なければ、全世界は皆皇國の郡縣となり、萬國の君長もことごとく臣僕に隸せんこと論を俟たずして自ら明らかなり。」

昨年七月、國內興亞諸團體が結合して、大政翼賛會の外郭團體として大日本興亞同盟を組織したが、其の綱領に於て

「本同盟ハ肇國ノ精神ニ則リ、八紘ヲ掩フテ宇トナシ、萬邦ヲシテ各ソノトコロヲ得シメ、兆民ヲシテ悉ク其ノ堵ニ安ンゼシムル大理想ノ下、世界ノ新秩序ヲ建設シ、恒久平和ノ確立ト人類文化ノ興隆トニ寄與セン」

と宣言してゐる。昭和の今日に於けるこのことが、既に一代の經世家佐藤信淵によつて早くも既に構想されてゐたといふことは、深き感慨を覺えしめるのである。

しかも彼は、單なる觀念的理想主義者に非ずして、知行一致の大政治家的風格を具へてゐた。彼の案に従へば、東京・駿府、名古屋の三鎮を皇都の守となし、浪花、膳所の二鎮を西京の護となし、高知鎮を以て南海の守備となし、其の他の九鎮の兵を以て亞細亞大陸經略の神兵を編成せんと欲したのである。滿洲の經略に當るべき軍隊は、青森・仙臺・沼垂・金澤の各鎮にし

て各々六萬人を出し、合計二十四萬人とする。之と並んで朝鮮を經略すべき軍隊は、松江・萩・博多各鎮より出す十九萬人をもつて構成する。次に親征軍たる南支方面經略軍は、熊本、大泊兩鎮より合計十四萬人を出して編成する。即ち總計百二十一萬人の大兵をもつて、大東亞の新秩序を戦ひ取らんとしたのである。

此の世界經綸は、萬邦萬民の救済を目的とするものであるから、これに抗する者は天下の罪人であると論じ、彼の不退轉の大信念を吐露してゐるのである。

明治以來、多分に自由主義的教育を受け、安價なる人道主義に災ひされてゐる從來のインテリ層は、或ひは此の如き信淵の思ひ切つた大東亞攻略に對し、全幅の賛意を表することを躊躇するかも知れぬ。然し我々は、大東亞が太古に於て皇國を親國とする東大神後の家族團であつたことを知つてゐるのである。故に大東亞皇化圈の建設は、亞細亞を其の本然の姿に復歸せしむることに過ぎないのである。佐藤信淵の魂の根柢には、潜在意識的にこの歴史的因縁の直觀があつて、此の如き亞細亞復古維新の混同秘策を唱へたのではあるまいか。

我々は信淵の優れたる思想から多くのものを學ぶことが出来る。彼は幕末に於ける押しも押されぬ皇道學者として、數多の書を述べてゐるが、決して學問の爲の學問、思想の爲の思

想に墮さなかつた。實に彼の「學」は、惟神の大道を中外に顯揚するが爲の精神的武器であつたのだ。そもそも皇國に於てはあらゆるものが、上 陛下の遂行し給ふ天業の實現に翼賛しなければならぬ。さればあらゆる學問と思想とは、この明確なる自覺の下に總動員さるべきものである。今や信淵の胸中に凝りし大經綸は、具現化して神兵百萬鵬翼を伸ばして、南海幾千キロの廣域にわたつて着々其の實現を見んとしてゐる。皇國に於けるあらゆる技術・文化・思想・學問は、正に此の大進軍と相呼應して、東亞永遠の平和を築く、天業翼賛に向つて動員されねばならぬ。

七 世界神政復古人類一家體制の建設

東亞新秩序建設戰即世界新秩序建設戰

佐藤信淵の宇宙混同秘策は、先づ東亞より始まり、次第に世界の君長をして、わが「すめらみこと」にまつろはしめる世界新秩序の建設へと向ふのである。從來我々が教へられてきた所によれば、大東亞の新秩序を建設し、以て世界新秩序の基礎を置き、やがては世界永遠の平和を招來せんとすることが、國策の要諦であつた。然るに世界史の轉換は、時間的にも空間的にも、東亞より次第に世界大にまで進むといふ「漸進的態勢」を取るべく、餘りにも急速となつたのである。今や東亞即世界へと飛躍する時代が到來した。

我國が、世界新秩序建設を最高國策とすることは、我が肇國の理想と國體精神に於て、明らかである。それを最近に於て最も明瞭に、且つ感銘深く我等に示されたものは、一昨年九月二十七日に締結された日獨伊軍事同盟條約並に其の際に賜はつた御大詔である。

右三國條約前文は

「大日本帝國政府、ドイツ國政府及イタリア國政府は、萬邦をして、各其の所を得しむるを以て恒久平和の先決要件なりと認めたるにより、大東亞及歐洲の地域に於て、各其の地域に於ける當該民族の共存共榮の實を擧ぐるに足るべき新秩序を建設し、且つ之を維持せんことを根本義と爲し、右地域に於て、此の趣旨に據れる努力に付相互に提携し、且つ協力することとに決意せり」

と述べ、世界萬邦をして各其の所を得しむる世界新秩序の建設を以て、日獨伊軍事同盟締結の目標となしてゐることを明らかにし、従つて三國政府は

「更に世界到る所に於て、同様の努力を爲さんとする諸國に對して、協力を齎^{あづか}らざるものにして、斯くして世界平和に對する三國終局の抱負を實現せんことを欲す。」

と宣言してゐる。

世界平和の實現が、三國同盟の終極の抱負であるが、こゝに述べられた世界平和は、從來英米が主張して來た偽善的世界平和とは根本的に相違するものである。英米の世界平和は、其の思想世界觀が個人主義であるから、萬民が相互に平等自由であることを必然たらしめ、其の間

に乗じて、自己の私利私欲満足の爲に、帝國主義的に世界萬民を奴隸化し、之を支配するの謂に外ならなかつた。このことは從來の歴史が我等に生々しく訓へてゐる。

新しき世界の眞の平和は、萬邦が、かゝる個人主義的世界觀を拂拭して、萬邦夫々其の所を得て生まるべき平和である。萬邦が其の所を得るときは、皆安んじて世界平和をこれ念とするのであるから、相互の鬭争は起り得べくもない。これ眞の平和が實現される所以である。而して「其の所を得る」とは、繰返して述ぶるが如く、諸民族諸國家が、各々其の生命的秩序に従つて天與の使命を感得することである。生命的秩序に従ふといふことは、民族生命を通じて宇宙大生命を見出し、之に隨順することである。然れば、即ち宇宙大生命の中心たる「すめらみこと」に、萬邦兆民が歸一することが、眞の平和の前提であることは自明であると云はねばならぬ。

されば三國同盟締結に際し、賜はりたる御大詔は、

大義ヲ八紘ニ宣揚シ神輿ヲ一字タラシムルハ實ニ皇祖皇宗ノ大訓ニシテ朕ガ夙夜眷々措カサルトコロナリ

と仰せられ

萬邦ヲシテ各々其ノ所ヲ得シメ兆民ヲシテ悉ク其ノ堵ニ安ンセシムル

ことをもつて念とし給ふことを述べさせ給ふた。三國條約は實に此の大御心に従つて締結されたのであつた。かくてこゝに明確に、皇國を中心とする親子一家の生命的家族體制の實現が、

最高の國策なることが昭示されたのである。

此の大御心に従つて、三國は先づ、夫々大東亞及歐洲に於ける新秩序の建設を相互に承認し約束したのであつた。

右條約第一條は、日本は獨伊の歐洲に於ける新秩序建設に對する指導的地位を認め、之を尊重することを約し、第二條は、獨伊が日本の大東亞に於ける新秩序建設を承認し、之を尊重することを約してある。

本同盟はその締結の遠因を、昭和十一年十一月廿五日に締結された日獨伊防共協定に置くものである。「防共協定」は、世界史上稀に見る精神協定である。即ち、民族世界觀の目指すところが同じであることによつて結ばれた協定である。即ち、宇宙中心生命から個人生命を切離して、個人をあらゆる價値の根柢に置くところの個人主義、自由主義、共產主義に對立して、宇宙生命に歸一する民族生命の再建を圖らんとする高貴なる精神に協定締結の眞因が在つた。

かゝる精神協定を前提として締結せられた三國同盟なるが故に、御大詔は、獨伊に對して其ノ意圖ヲ同シクスル獨伊

と仰せられたのである。

「其ノ意圖」とは、今迄述べ來たつた如く、實に世界新（眞）秩序を建設せんとする意圖である。

其後獨伊は、歐洲に於て、個人主義世界觀に立つ英佛其他の諸國と戦端を開き、更に昨年六月にはソ聯に對して宣戦し、殆ど歐洲大陸を席捲して、其の目指す新（眞）秩序の建設に日夜挺身しつゝある。

皇國も亦あらゆる努力を拂つて、大東亞共榮圈の建設に猛進しつゝあつたのであるが、此間英米はやつきとなつて之を阻害した。茲に於てか遂に、昨年十二月八日米英に對して宣戦の大詔が換發せられた。

獨伊も、日獨伊三國軍事同盟の規定に基いて、直ちに米國に宣戦を布告し、今や世界を擧げ

ての大戦亂となつたのである。而して、大東亞戦争の開始された三日目の十二月十一日、日獨伊三國は更に其の結びを鞏固

にすべく、「日獨伊協定」を締結した。之は「對米戰共同遂行、單獨不講和、及新秩序建設に關する日獨伊協定」であつて、

第一條 日本國、ドイツ國及イタリア國はアメリカ合衆國及英國に依り強制せられたる戰爭を、

其の執り得る一切の強力手段を以て勝利に終る迄遂行すべし。

第二條 日本國、ドイツ國及イタリア國は相互の完全なる了解に依るに非ざれば、アメリカ合衆國及英國の何れとも休戰又は講和を爲さざるべきことを約す。

衆國及英國の何れとも休戰又は講和を爲さざるべきことを約す。

第三條 日本國、ドイツ國及イタリア國は戰爭を勝利を以て終結したる後に於ても亦千九百四十年九月二十七日其の締結したる三國條約の意義に於ける公正なる新秩序招來の爲最

も密接に協力すべし

の三ヶ條を骨子とするものである。

更に一月十八日伯林に於て、日獨伊三國間の協同作戰指導要綱が決定された。こゝに規定されるが如く、日獨伊三國は、單に英米を武力によつて屈服せしめることだけでは満足しないのである。從來の戰爭は、單なる武力の抗爭であり、其の目的とするところは、霸道的に相手を叩きのめして、その結果、賠償金、其他取り得るあらゆる利益を徹底的に搾取

することであつた。今度の戦ひは之に反して、萬邦をして其の所を得しめ、生々發展せしむる大慈悲心より發するもので、一殺多生のなさけの劍である。故に戦ひに勝つても尙、「三國條約の意義に於ける公正なる新秩序招來の爲最も密接に協力す」ることを約してゐるのである。

戦ひは既に世界大に擴大せられた。戰爭の眞の終結は、新秩序の成員たるべき世界諸國が、干戈を停止して民族本然の姿にかへるまでは齎らされないものである。

東亞の新秩序はかくして世界の新秩序と、時間的にも空間的にも表裏一體のものとなつたのである。兩者を切り離すことは殆ど不可能となつた。大東亞より英米の策謀を排除することは、英米が屈服し、世界新秩序に向つて更生の發足を爲すに至らねば不可能であり、且つ又大東亞より英米を完全に掃蕩すれば、英米は既に第三第四流國家に顛落し、内部崩壊を來たし、そこには日獨伊樞軸を中心とする新世界があらはれ来る。故に今日より以後、大東亞新秩序の建設は、一方に世界新秩序建設を指向しつゝ行はれなければならぬ。即ち皇國民は、世界新秩序建設の大猛志を常に保持しつゝ、はじめて東亞新秩序の建設を進展せしめ得るのである。

一昨年九月二十七日の三國同盟が世界真秩序の建設を意圖しつゝも、現下の方針としては、相互に大東亞、並に歐羅巴に於ける新秩序建設に専念することを約したるに對し、今度は直ち

に世界的規模に於ける「公正なる新秩序招來」を、端的に意圖してゐることは此の理由によるのである。

去る十二月十六日、第七十八臨時帝國議會に對し賜はりたる勅語に於て

東亞ノ安定ヲ確立シ世界ノ平和ニ寄與セムトスルハ朕ノ軫念極メテ切ナル所ナリ
と仰せられ、つゞいて

此ノ秋ニ當リ帝國ト意圖ヲ同シクスル、友邦トノ締盟愈々緊密ヲ加フルハ朕ノ甚々懌フ所ナリ
と宣ひ、獨伊と固き盟約の下に、東亞を安定して、世界平和の克復を念願し給ふことを明らかにし給ふてゐる。

我々はかくて、東西相呼應しつゝ、天皇を中心とする世界一家體制の建設に向つて、協心戮力翼賛の微衷を捧げなければならぬ。

第二の天の岩戸開き

多くの識者は、大東亞戰爭を以て第二の天の岩戸開きであると言つてゐる。第一次の天の岩戸開きは、神々の集ひ給ふ高天原に於ける太古の大事業であつた。この天の岩戸開きによつて、天照皇大神の、六合に照り徹らす大稜威が再び輝きいで、さばへなす邪神の策謀は悉く破れて、凡てが靜謐に歸し、天上の世界は闇黒より光明へと轉廻した。爾來歷代天皇は、皇祖皇宗の御訓のまにまに、世界光臨の天業恢弘に向つて御精進遊ばされたのであるが、此の數千年間暗黒の時代は續き、古今に通じて謬らす中外に施して悖らざる惟神の大道は、さばへなす異端邪説のために妨げられて、世界萬民の仰ぐところとならなかつた。然し乍ら天運再びめぐり來たり、世界新秩序の構想は、日獨伊樞軸を中心として展開され、萬古の祕史亦世にあらはるゝの機運に際會し、英米の没落は只時間の問題となつた。かくて再び皇位は世界の天位として仰がれ、

天照皇大神の日嗣にまします「すめらみこと」が、世界萬邦の上に囁々たる大稜威を發揚遊ばす神機が到來したのである。此の稀有の秋に際會して、我等臣民の感激や、たとふるものがないのである。これを、これ第二の天の岩戸開きと云ふ。

我々は此の如き宇宙の神祕なる轉廻を、ひしひしと胸奥に感ずるのである。我々は三千年來、

國民の血液の中に潜在意識として潜んできた八紘一字の信念が、現下の世界的動亂の只中に於て、着々として具象化され、現實化されつゝあることを感得するのである。これは全く神意の開顯としか思はれない。我等は此の神機を失ふことなく、たゞひた押しに天業恢弘の翼賛道を、奮直に前進しなければならぬ。而して、争鬭と嫉視の暗黒世界に沈溺せる四海同胞を救済して、「すめらみこと」の放射し給ふ精神的光明に浴せしめねばならぬ。こゝに惟神大道の中外顯揚が必然の要請となるのであり、このことたるや實に爾臣民と呼びかけ給ひ、特に我等日本國民に對して下し給へる陛下の御命令である。

世界經綸の眼目天皇の御本質を知れ

從來我國の首相や外相は、常に我國の國是は世界平和の樹立にあることを聲明して來た。然るに諸外國は之を信ぜず、むしろ其の反對に、日本は侵略國なりと早斷して、我平和政策に應じなかつた。それは何故であらうか。

それは、一言にして云へば、諸外國の頑迷不靈もさることながら、一つには輔翼の重臣達が、眞に我が國體の大義に徹して居なかつたからではあるまいか。而して日本は、上に 天皇がしろしめし、下臣民はすべて 天皇の御意志を實現すべく翼賛する「絶對國」であつて、諸外國の如き「相對國」と根本的に異なるものであることを世界に鮮明にし、且つそれを徹底的に實現することを怠つてゐたからである。

日本が「天皇國」であると云ふ眞面目を發揚せしむる運動こそは、大政翼賛運動なのである。日本は 天皇がましましての皇國であり、 天皇がましまさねば日本國も日本臣民も存在し得ないのである。 天皇の御本質を鮮明にしなければ、日本のいかなることもわからないのである。従來の政治家も、亦日本の外交官も、此の點についての考へが足りなかつた。

天皇の御本質は、國體の中樞をなすものである。我々は既に數章にわたつてこのことに關して其の一端を明らかにした。しかし更にこゝに一二附加するものがある。

天皇の高貴此上もなき御本質は 皇室の祭祀に端的に示されてゐる。皇室の祭祀は洩れ承はる所から推斷すると、ひとり日本國民を對象とするものではなく、實に世界全人類をその對象となすものである。我々は、神話の源流をさぐり、そこに日本の神は、日本民族の神であると同時に、世界人類の祖先神にましますことを知つたのであつた。宜なるかな、 天皇の御意

志の發現である御詔勅は、萬邦をして其の所を得せしむることを明らかにし、御製は四方の海
みな同胞と詠まれてゐるのである。

若し 皇室祭祀の意義が、世界全人類に徹底し、大御心はあらゆる對立相剋を超えて彼等を
公平無私に生成化育せしめらるゝものであることがわかれば、彼等は翕然として皇國に靡き來
たるのであり、天業恢弘は水の低きに流るゝ如く、自ら實現されてゆくのである。こゝに於て
か惟神大道の世界宣布を目的とする思想戦が、皇道外交と並行して行はれねばならぬ必然性が
存在するのである。

扱て皇室祭祀として重大なるものに「大祀」があり「大嘗祭」がある。これらに就いては既
に述べた。國民はすべて他の者から被ひをしてもらふのであるが、陛下に於かせられては、
自らの御手によつて被を遊ばすのである。それは全人類の罪穢を一身に御擔ひ遊ばして、自ら
のためでなく、全人類のために被ひ清め給ふことを意味する。こゝに全人類の大御親としての
御姿が如實に顯示されてゐる。

次に伊勢神宮に於て行はれる「心の御柱祭」は、また全人類の大御親としての「すめらみこ
と」の御本質を明らかにするものである。

「心の御柱」は、天皇が宇宙を總攝し給ふ 天照皇大神と交感せられて、御一體になる「神
靈的通路」であると拜察される。それは實に祭政一致の道の顯著なる表現であると考へられる。
この「心の御柱祭」に於ては、先づ 陛下の身の丈を御はかりした竹柱を、心の御柱、即ち眞
の御柱として中央に樹て、其の周圍に四本の別柱を立てる。これは即ち、宇宙の根本的原動力
たる、「五行」を象徴するのである。即ち古事記の序文に於て 天皇の御經綸が、「二氣の正し
きに乗じて五行の序を齊へ」ることであると記されてゐるのに對應する。迺ち中央の眞の御柱
は、黄色の土の働きを表現し、東方の別柱は青色の木働きを、南方の別柱は赤色の火働きを
を、西方の別柱は白色の金の働きを、北方の別柱は黒色の水の働きを、夫々に表現するものと
解釋される。

尙、更に東西南北の各々の別柱は、春夏秋冬を示してゐる。黄色の土はあらゆるものを生成
し、且つ化育する宇宙の母たる役割を演ずるものである。畏くも、陛下は、この意味に於ての
土の働きを象徴する心の御柱の御顯現者として、一視同仁に萬物を生成化育せしめられる崇高
無比の祭祀を執り行ひ給ふのである。陛下は御親祭に當りて、「黄檜染の御袍」をお召しに
なる。それは土の黄色を表はすものと拜察する。又御袍に竹の模様がついてゐるのも、この眞

思はれる。尙、戴冠式に於ては、新王がヤコブの枕石の前に膝まづいて禮拜するが、之もユダヤの風習に由来するのである。此の點からも英國の「ユダヤ性」が知られる。果して然らば、英國王室の如きは、太古に遡れば、わが 天皇の臣下的立場にあつたものである。

此の如き皇國の絶對尊嚴性を、現在頼るべき何者もなく「漂へる」状態に呻吟する世界萬邦の民草に徹底せしむることが、皇國世界經綸の大眼目でなければならぬ。

從來に於ける我國の對外文化宣傳なるものは、我國の文化が、歐米ことに英米的文化に比べて、決して劣らないものであるといふことを宣傳することに、最高の目標が置かれてあつたのではあるまいか。この態度は歐米文化を優れるものとし、之に追隨せんとする心理状態から生ずるものである。我國の文化的指導者は、あまりにも長く歐米的視野に閉込められて來た人々であつて、歐米人に對しては、歐米の様式でなければ理解させることが出來ないと思ひこみ、皇國の優れた生命文化さへも、歐米的形式に引き下げんとした。而して、何等皇國の本質的なものを提示せず、彼等をして積極的に之を理解せしめんとする努力を行はなかつたのである。只被告的な立場から、彼等の同情と、關心とを得んとする卑屈な態度に終始して來た憾みがあつた。

ドイツは前大戰に於ては、武力に於ては常に優勢であつたにも拘はらず、遂に文化戰、思想戰、經濟戰に於て敗れたが爲に、百萬の強兵もあへなく崩壊し去つたのである。今日大東亞戰に直面して、我國の文化思想戰體制が頗る不完全なることを深く遺憾に思ふと同時に、我國文化指導者の猛省を要請して止まないものである。

まして皇國の使命は、全世界人類を啓蒙自覺せしめ、之を救濟することにある。此の使命感が強烈なればなるほど、我國本然の姿を直截簡明に、相手に理解せしむべき筈である。かくてこそ雄大にして、且つ氣魄の籠つた文化思想宣布が展開される。此の生命力の横溢した宣布に對しては、生きとし生ける者みな感應せずには居られない。而して、此の如き眞率なる人類救濟の叫びに對して、尙妨害せんとする者には、徹底的なる膺懲が行はねばならぬ。これ實に皇國の「ならぶる者共をことむけやはし、まつろはぬ者を討ち平げる」大慈悲の大御心なのである。

國家總力戰下に於ける皇國の絶對優位性

皇國世界皇化の思想文化戦に際して、こゝに用意されねばならぬものは、思想・教學・政治・外交・經濟體制の確立である。即ち現下の戦ひは、國家總力戦なのである。ルーデンドルフはかゝる見地から

「軍隊は國民の中に其の根を持つ、要するに國民を形造る一部である。従つて總力戦に於ける軍の強弱は、國民の肉體的、經濟的、及び精神的強弱に左右される。就中精神力は、非常な長期に亘る戦争に際し、國民維持の爲めの生存闘争に於て必要とする團結力を與へるものであり、この團結はまた、國民存亡の爲に行ふこの種戦争に、長期の決を與へるものである。惟ふに今日、何れの國家も、軍の裝備や訓練を等閑に附してはゐない。而してたゞ精神的團結のみが國民をして、戦時悪戦苦闘の中に在る軍に終始新たなる精神力を注入し、軍の爲に盡し、戦時の苦難の中に於ても、將また敵の戦争行爲の下に於ても、自ら必勝の信念に燃え、敢然として抵抗を繼續させるのである。」(國家總力戦)

と述べてゐる。

而してかゝる國民の精神的團結は、何によつて齎らされるかと云ふと、それは實に其の國民固有の、歴史と傳統の中に見出される民族精神であると彼は主張してゐる。

「吾々は世界大戦中には、依然基督教國民であり、——多數の獨逸人は唯名義だけの信者であつたが——且つ偉大な働きを爲した。然しそれは基督教徒であつたが爲ではなく、寧ろ國民精神が覺醒して、從來基督教が國民精神の上に覆ひかけて居た塵を拂つて其の精神を發揚し、國民を激勵して國民の生存維持の爲に赴かせた爲である。」

と述べて、更に基督教が國民的團結を來たさしむる所以でないことを摘發し、

「基督教を信奉する國民は、政府と國民との結合、國民と軍隊との結合、及び全體の形成する國民生活を基調とする固有の信仰を持つ所の、日本國民の如き幸福な境遇に置かれて居ない。抑も基督教の教義は、吾々の民族的傳統とは甚だしく背反し、國民の傳統を絶ち、固有の精神的團結を奪ひ、その抵抗力を無にするものである。」

と説いて、日本國民の世界無比なる團結力を稱揚しつゝ

「總力戦遂行にあたり、何れの場合でもその基礎となる國民の精神的團結は、民族傳統と信仰の統一、及び民族傳統の生物學的及び精神的法則並に、性質を慎重に顧慮する以外他に手段がないのである。」

と喝破してゐる。

これは前大戦に於て向ふところ敵なく、ヒンデンブルグの參謀長として露西亞の大軍をタンネンベルヒに包圍殲滅するの偉功を奏したルーデンドルフが、遂に思想經濟戰に敗れ去つた獨逸の慘澹たる經驗に喘ぎつゝ感得した悲痛なる叫びである。

長期戰に於て最期の勝利を決する國民的團結力に於て、外國人が見ても、日本は正しく、天は此の國を最後の勝利者として作つたものゝ如く、あらゆる條件に適應してゐるのである。ルーデンドルフは、日本國體こそ眞に理想的な國家總力戰の生命原理に立つものであることを指摘し、

「恐らく大部分の國家は、國民團結の問題に就いて何等の對策をも講じ得ぬであらう。それらの國々は、如何に人間の心と國民精神とを取扱ふべきかを全く知らない。」
と述べてゐる。こゝに、獨逸が我が國體を、彼等の建設せんとするドイツ民族共同體の模範となし、理想として仰ぐ所以が存するのであるが、其の一方、英米其他、民主々義國家が、戦ひの最期を決定する國民的團結に於て、到底皇國の敵でないことが明瞭に指摘されてゐる。現在の歐米的基督教は、ユダヤの策謀に乗つて、デモクラシー及社會主義と密接なる關聯を持ち、寧ろ英米民主々義國家のスパイ網にまで墮してゐるから、基督教國家は、現在のまゝではルー

デンドルフの説くが如く、到底強固なる民族的團結を實現し得ないのである。

民族的團結なくして、國家は遂に崩壊する。民族的團結は民族生命への没入歸一によつて成し遂げられるものであつて、それは即ち民族固有の歴史と傳統への回顧復活に俟たねばならぬ。而して遂に之が「民族的信仰」にまで高められねばならぬのである。

民族を無視し、民族的信仰を棄てた唯物共產主義ソ聯が、獨蘇戰の勃發と同時に、其の捧持せる共產主義を放棄せざるを得なくなつて、ロシア民族精神の鼓吹に狂奔し、共產主義國家の自殺的矛盾を暴露しつゝあることは、當然とは云へ笑止に堪へぬ次第である。

強固なる民族的團結が、ゲ・ベ・ウの強壓によつて永遠に繼續するといふことは決してあり得ない。自らの民族生命に對する深き自覺によつて、凡てが結ばれるときにのみ永遠にして且つ不壞の結びが成立する。今日のソヴィエトロシアの強さは、無知に加へられた壓制の結果に過ぎない。六十數種の種族より構成せられたソ聯が、民族精神の昂揚によつて自らを自覺するとき、それは却つて内部崩壊への因子を育成するが如きものとなる。こゝにもソ聯邦の内部的矛盾が看取される。いづれにしても、國基を民族生命の紐帯に置かず、之を無視し、呪詛した唯物共產思想國家の分裂瓦解は、單に時間の問題に過ぎないのである。

これは前大戦に於て向ふところ敵なく、ヒンデンブルグの參謀長として露西亞の大軍をタンネンベルヒに包圍殲滅するの偉功を奏したルーデンドルフが、遂に思想經濟戰に敗れ去つた獨逸の慘澹たる經驗に喘ぎつゝ感得した悲痛なる叫びである。

長期戰に於て最期の勝利を決する國民的團結力に於て、外國人が見ても、日本は正しく、天は此の國を最後の勝利者として作つたものゝ如く、あらゆる條件に適應してゐるのである。ルーデンドルフは、日本國體こそ眞に理想的な國家總力戰の生命原理に立つものであることを指摘し、

「恐らく大部分の國家は、國民團結の問題に就いて何等の對策をも講じ得ぬであらう。それらの國々は、如何に人間の心と國民精神とを取扱ふべきかを全く知らない。」

と述べてゐる。こゝに、獨逸が我が國體を、彼等の建設せんとするドイツ民族共同體の模範となし、理想として仰ぐ所以が存するのであるが、其の一方、英米其他、民主々義國家が、戦ひの最期を決定する國民的團結に於て、到底皇國の敵でないことが明瞭に指摘されてゐる。現在の歐米的基督教は、ユダヤの策謀に乗つて、デモクラシー及社會主義と密接なる關聯を持ち、寧ろ英米民主々義國家のスパイ網にまで墮してゐるから、基督教國家は、現在のまゝではルー

デンドルフの説くが如く、到底強固なる民族的團結を實現し得ないのである。

民族的團結なくして、國家は遂に崩壊する。民族的團結は民族生命への没入歸一によつて成し遂げられるものであつて、それは即ち民族固有の歴史と傳統への回顧復活に俟たねばならぬ。而して遂に之が「民族的信仰」にまで高められねばならぬのである。

民族を無視し、民族的信仰を棄てさつた唯物共產主義ソ聯が、獨蘇戰の勃發と同時に、其の捧持せる共產主義を放棄せざるを得なくなつて、ロシア民族精神の鼓吹に狂奔し、共產主義國家の自殺的矛盾を暴露しつゝあることは、當然とは云へ笑止に堪へぬ次第である。

強固なる民族的團結が、ゲ・ベ・ウの強壓によつて永遠に繼續するといふことは決してあり得ない。自らの民族生命に對する深き自覺によつて、凡てが結ばれるときにのみ永遠にして且つ不壞の結びが成立する。今日のソヴィエトロシアの強さは、無知に加へられた壓制の結果に過ぎない。六十數種の種族より構成せられたソ聯が、民族精神の昂揚によつて自らを自覺するとき、それは却つて内部崩壊への因子を育成するが如きものとなる。こゝにもソ聯邦の内部的矛盾が看取される。いづれにしても、國基を民族生命の紐帶に置かず、之を無視し、呪詛した唯物共產思想國家の分裂瓦解は、單に時間の問題に過ぎないのである。

米國內部の民族は頗る多様であつて、民族的歴史的傳統を殆どもたない點から、國家的團結は甚だ脆弱なのである。即ち物質的欲望利害の一致のみが、團結の因子となつて居るのに過ぎないのであつて、利害相反すれば、勿ち離反し分裂する性格を持つてゐる。現代の米國は一部ユダヤ金融財閥の支配下に立つもので、ルーズヴェルトの如きも、米國の經濟界と言論界を支配してゐるユダヤの傀儡に過ぎない。其の結果、眞の米國人の輿論は、外部に現はれてゐない。従來ルーズヴェルト大統領の參戰政策に對して、反ユダヤのリンダバーク大佐や、銀シャツ黨を率ゐるウィルアム・ダッドレー・ペレー等が、勇敢に反對し、彼をユダヤの傀儡、米國民の敵であると叫びつゞけて來たことは人の知る通りである。

若し今後長期にわたり、大東亞戰爭が遂行され、米國が窮地に追ひこまれるならば、必ずや米國には革命が起り、内部崩壊を生ずるであらう。ペレーは自ら自分の祖先は日本人であると云ひ、日本の歴史を研究し、皇室を尊崇し、かつて日本に來たこともあり、常に日本は神國なりとして敬慕してゐるのである。その他、アメリカに住む千三百萬の黒人は、今迄の壓政に對して、いつ白人に向つて反逆するかも知れないのである。

若し我國が、かゝる眞の米國の同志に働きかけて、世界人類救済の大御心を説き、永遠平和

の確立を示唆するならば、彼等は忽ち全米國人に今迄の非をさとし、皇國にまつらふ運動を内部に於て勇敢に展開するかも知れないのである。

何れにしても、世界萬邦中、我國に勝る國民的團結を有し得るものは皆無である。このことは、日本が遂に世界に於ける最期の勝利者であることを明瞭に物語るものと云はねばならぬ。何故に日本は然るのであるか。それは今迄述べて來た通り、日本の本は靈の本であり、世界人類の生命の親國であるといふ事實に由來するからである。

我々は、此の無比絶對の國體を愈々明徴にし、世界人類の「祖」にして「神」なる 天照皇大神に對する信仰を益々深化しなければならぬ。それは直ちに 天皇に對し奉る信仰であり、國體の信仰である。大政翼賛會實踐要綱が國體信仰を説いてゐるのもこのためである。

惟神の大道にまつるふ世界宗教

基督教が遂に國民的團結を來たさしめず、世界大動亂期に當つて、民族精神の昂揚の前に光を失ひつゝあるのは何故であるか。

基督教はイスラエルのイエス・キリストが創始せるものである。キリストはユダヤ教の頑迷不純を純化して、ユダヤ人をして眞に正しき神を仰がしめ、覺醒せしむるがため、死を以てたゞかつたのであつた。然るに近世に及び、キリスト教は不幸にもユダヤ世界支配の具に供さるゝに至り、其の方向を逆轉したのである。キリストがその教へを説いたのは當時のユダヤ人が腐敗墮落してゐたので、彼等をして神に歸依せしめ、神の愛の救ひによつて、祖國イスラエルの復興を念願した祖國救済の忠誠心に外ならなかつたと考へられる。

『イスラエルの迷へる羊の外に我は遺はされず』といふのがイエスの信であつた。彼は決して空漠人道主義などセンチメントの虜となつて、遠近觀疎の別を忘れる如きことを爲さなかつた。然し彼は飽くまで祖國民に、『忠』であつたが故に、異邦民の『忠』にも感動し、是に對して『忠』ならざるを得なかつたのである。祖國と稱へ同胞と呼ぶを小として、世界人類といふを合言葉とする我新思想家の如きを見れば、イエスは恐らくヨハネの如く『見たる爾の兄弟を愛せざる者は見ざる爾の神を愛す能はず』と云ふであらう。

イエスの爲には『奈良』『京都』であり、又『桃山』であるエレサレムに入つて、其の御殿の裏（奥）されて居るのを見ては、『其中なる凡ての賣買する者を遂出し、貸銀する者の案、鴿を

賣る者の椅子を倒し、彼等に曰ひけるは、我家は齋齋の家と稱へらるべしと録さる。然るに爾曹これを盜賊の巢となせり』と叱咤して居る。私的行爲に就いて『惡に對する勿れ、人爾の右の頬を打たば左の頬をも轉じて之に向けよ』と云ひ『鴿の如く馴良かれ』と訓ふる彼は、祖國の公的生活に關しては斯かる憤を發してゐる。〔河村幹雄博士遺稿「名もなき民の心」のうち「基督の信について祖國愛のうかがはるゝ節々」より〕

日本メソヂスト教會の今井三郎氏は

「キリスト教の中心思想は何と言つても『愛』であります。しかも『宥す愛』であります。キリスト教の第一の誡律は唯一神の信仰でありまして、『心を盡し、精神を盡して』宇宙の統一的中心である父なる神を愛し尊敬し、これに事へるといふことで、この宇宙は神の創造せられたもので、人類は神より生れいでたるものであるが故に、神と人とは父子有親の神祕的關係にあるものであります。」

「次にキリスト教は三世を貫く大生命の片われとしての神の子の自覺の上に立つものであります。人は神より生れて神に歸るもので、その初め人は神の肖（すがた）に像つて造られたものなれば神の子なりと信じ、神の子としての價値を認識すると共に、父なる神に孝順の道を盡すこと

がその特質であります。而してこの神の子は各民族の特異性の中にその姿を現はすもので、従つて我々にとりましては我國の民族的、特異性を無視した神の子は空であります。

キリスト教のモーゼの十誡の中にも「汝の父と母とを敬へ」と、子たるものはその兩親を敬ひ、凡て道に合へるその命令に服従すべきことを要求し、更に進んで國家の治者をも人民の父として尊敬し、これに事へ、日々これが爲に祈禱し、善行をもて國家に奉仕することを訓へ「若しこの權に悖ふ者は神の定に逆くなり、逆くものは自ら其審判を受く可し」と誠めてあります」(教學局編纂、日本語學振興委員會研究報告、第二篇)

と述べてゐる。キリストは實に當時のユダヤ民族が、正しき唯一の神を信仰せずして、誤れる神を信じてゐたのを改めて、正しきにかへさんとする宗教的精神的維新を實現せんと志したのであつた。今井氏が述べてゐる如く、唯一神の信仰、即ち宇宙の統一的中心である父なる神を愛敬することこそ、キリスト教に於ける信仰の根本眼目である。而して宇宙の統一的中心たる神とは、全宇宙に於て 天照皇大神以外にはないのである。今井氏が「人類は神より生れいであるが故に、神と人とは父子有親の神祕的關係にある」と云つてゐるのは正しい。神は人類生命の始源でなければならぬ。人類生命の始源であるが故に、神は宇宙生命の統一的中

心になり得るのである。日本に於てはかゝる神として 天照皇大神を仰いでゐるのである。

モーゼが「汝の父と母とを敬へ」と訓誡したのは、父母は自己生命の源であるが故である。モーゼは生命の始源としての神のみを敬ふことを訓へたのであつた。キリストは此の精神を受けついで、自ら神の子なりと叫んで、生命の木流より遊離せんとしてゐたユダヤ民族の思想信仰を樹て直さんとしたのである。モーゼもキリストも共に、人類生命の中心たる 天照皇大神の信仰に到達してゐたものと思はれる。

處でユダヤ人は、モーゼやキリストの信仰を正しく解釋し得なかつたのみならず、遂にキリストを十字架にかけた。其の後、其の信仰を知的なギリシヤ哲學によつて解釋し、之を歪曲した結果、膨大なる神學理論の發生を見るに至つた。信仰が知的理解を必要とするに至つたことは、既に信仰の墮落である。神學愈々博大膨脹して、信仰の正統は益々中心から遊離する結果となつた。これは、キリスト教を曲解した後世のキリスト教信者が、宇宙生命の中心より血統的に直系を受けつぎ給ひ、眞に世界人類の中心としての親の愛を現實に垂れ給ふ現人神を見ることなく、これにまつるはなかつたところから生じたものである。神の子として現人神に仕へ

奉らなかつた彼等は、理論的にかゝる現人神を構想せんとした。これにキリスト教が、遂に觀念的擬制的神を創出するに至つた根本原因である。

モーゼは國家の治者をも人民の父として尊敬すべきことを説いてゐる。我國に於ては國家の治者 天皇は正しく國民の父にまします。モーゼは我國體の世界光被、即ち 天皇に全人類が仕へ奉るべきことを説いたのである。我國に於てこそはじめて、「若しこの權に逆ふ者は神の定に逆くなり」と云ふことが云はれるのである。我が古代秘史によると、モーゼは我國に來たり 皇太神宮に於て十誠を受けたと云はれる。果して然らばモーゼの神は、實に 天照皇大神に外ならなかつたのである。キリストの神も生命の始源としての神、即ち 天照皇大神であつたと考へられる。キリスト教に於ける「洗禮」は、我が惟神の大道に於ける「みそぎ」と非常に相通ふものがあるのは、このためではないかと考へられる。我が古代秘史によるとキリストも亦我國に來てゐる。キリスト教に於ける「天國」とは、實は我國であつたのではあるまいか。今井氏が「神の子は各民族の特異性の中にその姿をあらばす」といつて居ることもその通りであつて、神は民族の生命の始源であるが故に、民族に於て神の子たるの自覺は生れるのである。而して民族生命の始源は、また宇宙生命の中心乃至はそれより分派したるものでなければ

ならぬ。我が 天照皇大神こそは、民族生命の始源にして、且つ人類生命の始源である。いづれにしてもキリスト教は我國體を俟つてはじめて其の眞價を發揮することが出來、又それは惟神の大道のイスラエルの解釋としてはじめて之を正しく理解することが出來るのである。

然るにユダヤ民族は、生命の始源より分派して、此後其の中心を忘却し去つた爲に、いつしか觀念論が混入して、人は神より生れたものではなく、神によつて造られたものであると思ふやうになつた。此のユダヤの誤れる思考を、今井氏も亦そのままに受取つて、「その初め人は神の背に像つて造られたものなれば」と云つてゐるが、これは彼自ら「人は神より生れて神に歸るもの」と云ひ、「又人類は神より生れ出でたるものであるが故に」と云つてゐるとそこに重大なる矛盾を侵してゐる。ユダヤ人が此の如く誤れる思考に墮在してゐたが爲に、キリストは自ら神より生れたものとして、「神の子」の主張をしたのであつた。實にキリスト教は、我が惟神の大道を白色人種等に教傳するがための補助的教へなのである。

基督教によつて惟神の大道が明らかにされ、又生命を獲得したのではなく、惟神の大道によつてキリスト教は初めて其の本質を顯現することが出來るのである。即ちキリスト教は、我國體によつて、はじめて觀念的なるものより實質的なものへ生かしめらるゝのであると信ずる。

佛教に就いても正に此の如く思はれる。釋迦は、歸一すべき中心を失つた印度民族に、宇宙生命の中心に歸るべく教へを説いたのである。併乍ら、具體的に此の如き中心を見ることの出来なかつた民衆に對しては、當然理論的に之を解明してやらねばならなかつた。釋迦の弟子達も亦然りである。理論は更に理論を必要とし、遂に八萬四千の法門を生ずるに至つた。

佛教の中心は無我觀である。無我觀は中心歸一である。其の中心が日本の如く現實具體に示されぬことから、之を大日如來として説明し、又阿彌陀如來として説かざるを得なかつた。高楠博士は、佛教は本來始めから個人主義思想でなく全體主義であつたと主張されるが、それは中心歸一思想を説いたものであるからに外ならない。佛教を創始した釋迦の根本眼目は、キリストと同じく、宇宙の中心生命たる 天皇に歸一すべきことにあつたのである。故に佛教が我國に渡來し、國體觀念の明徴に貢獻するところがあつたのは、むしろ當然である。併乍ら印度に於ては、キリスト教に於けると同じく、其の根本眼目がいつしか失はれて、遂に觀念的理論に走つた結果は、個人主義的色彩を多分に帯びる宗門があらはるゝに至つた。小乘佛教は特に此の色彩が強い。

佛教が日本に渡來した當時に於ては、既にその根本精神に種々な附加的なものがくつゝいてゐた。我國に於ても、佛教が本來は惟神大道を外國人に理解せしむるための補助的教へであつたことを知らないで、所謂人類普遍の教理として、之を日本に受入れんとしたのであつた。そこに本地垂迹説の如き妙なものがあるのはあらはれたのである。

北畠親房は之に對して「大日本は神國なり。天祖はじめて基をひらき、日神長く統を傳へ給ふ。我國のみこのことあり。異朝にはその類なし。」と説いて、萬國無比の國體を顯彰すると共に、

「我『天照大神』大日の靈にましまして、明德を以て照臨し給ふこと陰陽におきて測り難し。冥顯につきて頼あり君も臣も神明の光胤を受け、あるひは正しく勅を受けし神達（カミタチ）の苗裔（ヒコイ）なり。誰か之を仰ぎたてまつらざるべき。此理を悟り、その道にたがはずば内外典の學問もこゝに極るべきにこそ。」

と述べて、儒佛二教みな國體の註釋たるべきことを説いてゐる。

「溪嵐拾葉集」は本地垂迹説の主張する如く、印度の佛が我國に來たつて日本の神々となつたのではなく、天照皇大神と大日如來（又は如意輪觀世音、大自在天）とは同一體なりとして、「大神宮の本地は日神也」「我國大日本國、西天は釋迦の應迹の國也」といふ風に、天照皇大

神の御神體は、日本にも現れ給ふが、日本のみでなく遠く印度にすら應現し給ふと説いてゐる。王法即佛法の思想もこれから出づるのであるが、しかし此の思想に於ては、天照皇大神を人種國家を超越した超絶的な神として考へてゐる。我等は更にこの思想を越えて、印度に於て釋迦によつて説かれた宇宙中心生命の神こそは、天照皇大神を印度に於て説明せんとしたものであると考へるのである。

キリスト教に非常な示唆を受けたマホメット、コーランも、亦同様に惟神大道のアラビア民族に對する説明であり、その顯現に外ならない。

佛教にもあれ、キリスト教にもあれ、はたまたマホメット教にもあれ、それらが「世界宗教」として従來說かれて來た範圍に於ては、必然その内容が、觀念的、超民族的、超國家的なものであつた。故にそれ等は、民族生命から遊離する危険性を多分に含み、ルーデンドルフが説いてゐるやうに、民族間の鬭争を現出しつゝある現代世界争亂の時代に於ては、漸次其の教義に對する疑惑を生じ、無力化して來るのである。此等の宗教は、本來は民族生命を通じて、始源生命に歸依没入するところに眼目があつたのであるが、具體的にかゝる歸依の中心を有せざる

民族の間にあつては、民族を越えた超絶的な世界神に對する宗教となつてしまつた。そこに民族宗教として、民族團結を齎らすものとならず、反對に個人と直接結びつく宗教となつて個人主義育成の肥料となり、そこに、民族的團結たる國家を内部的に分裂せしめ、無力化せしめ、以て世界支配の野望を達成せんとした英米ユダヤの乘ずる間隙を生ぜしめたのである。

故にまた、以上の諸宗教は、宇宙中心生命の具體的表現者であらせられる、天皇を仰がぬ諸民族の間に於ては、觀念的なものとして無力化するのである。此等の諸宗教は、實に我が皇國に於てのみ、其の歸依の對象を實質的に具體的に見出して、國民生活と一體化するものである。即ち我が國體に攝取せられてのみ、その眞價を發揮し得るのである。皇國に於てあらゆる宗教が存し、それが生かされてゐるのは此の故に外ならない。

此の如く皇國は、實に凡ての世界宗教が生かされる國である。

萬邦諸民族が、夫々の民族生命に歸ふことにはじまる所謂「全體主義」は、究極するところ、皇國體に於て最高完全なる其の實現を見るものである。故に全體主義國家は、必然に我國と其の意圖を同じくし、遂に皇國を仰ぎ見て歸依するに至るのである。

又民族的團結を破壊するものであるとして、これらの國々から次第に見棄てられんとしてゐ

るキリスト教、其他世界宗教も亦、我が國體によつてはじめて其の眞價を發揮し得るものである。何れにしても神秘的な天運の循環により、一步一步、皇國が萬國の親國として、又 天皇が全人類の大御親として、再び世界に君臨し給ふ第二の天の岩戸開きが進行しつゝあるのである。それ故に、我國の宗教家は皆、此の天理をいちやく洞見し、從來の如く個人的觀點より彼等の宗教を盲信することなく、（特に英米ユダヤの謀略に引かゝることなく、）此等宗教の根本相を明らかにして、國體を外國人に理解せしむる如く布教すべきである。

かくの如く、あらゆる既成の世界的宗教は、皇國による世界一家體制再建に奉仕すべきものであることがはつきりした。かくて戦亂の爲に、精神的に、亦肉體的に、苦痛混亂の生活に喘ぐ世界人類は、彼等の奉ずる宗教を通じて、亦皇國にまつらふことが出来るのである。かくしてはじめて皇國に於ける惟神の道、思想戰體制の確立は、世界新秩序建設の過程に於て、驚く可く偉大なる力を發揮するのである。

國內維新の急務と其の方途

皇道の世界經綸は、單に對外思想宣傳のみによつて成就し得るものではない。先づ對外宣傳の内容たるべき國內の、政治經濟文化、並に社會生活を、惟神の大道に基いて再編成再確立せねばならぬ。即ち、皇國の眞姿顯現たる維新が斷行されねばならぬことは、既に説いたところである。

翼賛政治體制の確立

大東亞戦争に突入した今日、兎も角も英米と云ふ強國を相手に、世紀の戦を貫通する爲には、一刻も早く國內の政治經濟思想體制を、長期戦に堪ふる如く改めなければならぬ。其の方策は、卷頭に述べた「基本國策要綱」に従つて、政府は漸次これを展開して行くものと信ずる。「基本國策要綱」は、國內維新の一切の基礎として、國體的自覺による強力なる國民運動を提唱した。これが大政翼賛運動であり、本運動によつて下から盛り上る國民の力を醸成しつゝ、其の威力を背景として、一切の國家機構の再編成を目指したのである。故に大政翼賛運動並にその推進體たる大政翼賛會は、當然高度の政治性を帯びなければならぬ。而して、眞の翼賛人を議會に送り、議會から從來の如きデモクラシー的色彩を洗ひ去つて、翼賛議會體を建設し、議會と翼賛會とを表裏一體たらしめ、更に進んで、翼賛會と議會の推進によつて官界新體制を實現せしめ、特に新體制の最基本たる教學の刷新を、一日も早く斷行し、地方中

央を通じて、上意下達、下情上通が、圓滑無礙に流通し、以て萬民翼賛の實が擧がるやうな、翼賛政治行政體制を確立しなければならぬのである。

治安警察法に規定されてゐる「政治結社」の政治、並に軍人勲章に仰せられてある「政治に拘はらず」の、政治の意味は、政權爭奪を目的とする歐米の自由主義的舊體制下に於ける政治の意味である。故に之と本質を全然ことにする大政翼賛會は、此の意味に於ての政治結社でないことは明らかである。しかし、さらばと云つて、大政翼賛會は、所謂「公事結社」であると直ちに定義することは不當であると信ずる。

翼賛會は高度の政治性を持たねばならぬことは、其の發生の經過から見ても當然であり、近衛前總裁はまた之を要求したのである。此の高度の政治性といふ場合の「政治」は、政權爭奪を前提とする、歐米思想に於ける政治概念とは全く別個の概念であつて、それは臣民が、天業にまつるふこと、即ち翼賛すると云ふ意味である。まつるふとは、歐米的な所謂權利義務の觀念を離れて、自己を虚しくし、陛下の行はせらるゝ天業遂行に、自己のあるだけの能力を捧げて、創造的活動を展開するといふことである。西歐流の個人主義は、自由なる個性展開のみを最後の理想とする。之が英米の所謂「人格主義」である。我が臣道に於ては、自己天與の個性

を創造的に充分展開するだけでなく、更にそれを、より高貴なる目的即ち神業翼賛に捧げるのである。茲に人格主義と臣道實踐の本質的差異がある。されば翼賛會は、新にして眞の意味に於ける政治團體でなければならぬ。

されば、外國的な政治理念を斷乎克服して、皇國本來の正しき惟神の政治理念を、全國民に徹底せしむる高邁なる「政治教育」を行ふことが、今日の急務である。

翼賛會の任務は、此の如き政治教育を通じて、舊體制的なる政黨的勢力を清掃して、下から盛り上る濃濁たる翼賛的國民勢力を、議會に洩れなく代表せしめることである。要するに、翼賛會が政治性を持つといふことは、翼賛運動の先驅的指導者が、同時に議員たる資格を獲得することではなければならない。來る可き總選舉に於てはこれが斷行さるべきである。

皇國は、萬民翼賛の大和の國であるから、あらゆる勢力が無差別に翼賛會に代表されねばならぬと主張する俗論がはびこつてゐるが、これは自由主義的なるバランス・オブ・パアアの思想であつて、舊體制以外の何ものでもない。惟神の大道は、大宇宙の循環そのまゝに、日に新たに、又新たななる國家生活を創造してゆくものである。これが爲には常に停滯する現狀を打破して行かねばならぬ。即ち民族生命の不斷の「新陳代謝」が當然に要求されるのである。

五ヶ條の御誓文に於て

一、官武一途、庶民ニ至ルマテ、各其志ヲ遂ケ、人心ヲシテ倦マサラシメンコトヲ要ス
と仰せられたのは、今日に於てもそのまゝに當て巖まるのである。大政翼賛運動は國家生命力の萎微退嬰を、唯物的で機構組織萬能の左翼的革命によつて、打開せんとするマルクス主義的策動を、飽く迄排撃しつゝ、これを天地自然の新陳代謝によつて、無理なく、しかも力強く行はんとするものである。従つてそれは「赤」ではない。

翼賛運動はあくまでも創造的政治運動であるべきものであつて、觀念的個人主義的修養運動に止まつてはならない。又單に、事務的な行政官廳の補助機關となり、下るべきものではない。翼賛會は、政府と表裏一體たるべきものであり、そのために總理大臣が總裁である。決して政府と上下的關係たる政府の補助機關ではない。こゝに於てか翼賛會主腦部は、翼賛の大道を躬を以て行する熱烈なる惟神の道の、信念的同志でなければならぬ。

かくしてはじめて、翼賛會を中核的推進力として、大政翼賛運動は活潑に展開され、國民全部がやがて惟神の道の同志として、鐵の如く團結を爲すに至り、議會も官僚も、皆みそぎされて、眞の翼賛政治の實現が期せられるのである。

翼賛經濟體制の確立

次に經濟面に於ては、從來我國に於て支配的であつた西歐的資本主義體制が、此際皇國經濟體制によつて根本的にあらためられねばならぬ。資本主義こそは、共產主義の温床であり、ともに唯物的個人主義的であることを忘れてはならぬ。我々は共產主義を排撃すると同じ心境で、資本主義を排撃するのである。マルキシズムのみを攻撃して資本主義にふれぬことは卑怯である。

皇國經濟の根本精神が、惟神の大道であることは云ふまでもない。ところで、惟神の大道、並に之と方向を同じくする王道や、獨伊の民族世界觀に於ては、人類の思想行動は、すべて精神の支配を受くべきものとする。勿論物心一如であるけれども、心が主であり物が従である。皇國經濟に於ては、西歐近代經濟思想に於けるが如き經濟第一主義を取ることはできない。

支那に於ては、天地の化育に參する生活を人間生活の理想としてゐる。天地の化育に參するところに、眞の人間生活がある。皇國に於てはこれをもつと具體的であつて、天地の化育に參じ給ふ。天皇に、ひたすらに隨順しまつるときに、人間本然の天性は發揮され、個性も十二分に活躍の地盤を見出し、天倫の樂が生じ、あらゆる生産が凝滞なく、その故に能率は最高度に發揮されるのである。即ち稻穂の神勅に示されてあるが如く、皇國經濟の根本理念は、一切の

經濟生活はたゞ 天皇の御爲に行はれなければならないといふのである。

而して此の天地の化育は、一陰一陽の統合、即ち秋冬春夏のめぐりゆくことによつて具體的にあらはれる。而して農業は、一陰一陽によつて萬物が育成される天道に隨順することによつて、具體的に行はるゝものである。されば道の遵守と農村生活とは密接な關係をもつてゐるのである。かくて日本に於て農業を重視する如く、王道並に獨伊に於ても、共通的農業重視の色影が濃厚なのである。

此等の思想に於ては、農を重視し、資本主義によつて破壊された農村を復興することによつて、人間本然の性を認識せしめ、以て人間をして機械を支配せしめ、資本家よりも學者技術者を重視して、生産能率を高度化せんとするのである。若し十八世紀にはじまつた産業革命を、第一次産業革命と稱するならば、人が機械に驅使せられた從來の生産構成に對して、人が機械を支配する人間精神尊重の生産組織は、之を第二次産業革命と名づけることが出来るであらう。獨逸は現在、此の第二次産業革命を實現しつゝ、偉大なる生産力を發揮し、強大なる經濟力を持つに至つたのである。若しも我國にして、惟神の大道に歸り、第二次産業革命を起し得るならば、近く大東亞の豊富なる資源を利用し得る現状に於て、必ずや世界に冠たる經濟力を涵養

するに至るのである。

思ふに、第一次産業革命は、商工第一主義であり、營利追求第一主義であり、消費自由勝手主義であつたのに對して、第二次産業革命に於ては、農が基本であつて、商工も農道精神によつて淨化せらるべきであり、互助共榮を旨とし、分配第一主義でなく、生産第一主義である。前者が、生産の源泉を「金」に置き、機械萬能合理主義となり、物が人を、經濟が政治を支配するに至つたのに對して、後者は、生産の源泉を人の精神と勞働に置き、生々化育の大自然を尊ぶ生命主義であつて、人が物を、政治が經濟を支配するのである。

されば第二次産業革命にあつては、農業の生産原理、即ち物をいづくしみ育て、報本反始の精神が經濟の基本原理となる。それはまた、延いては自給自足的農村家庭的生産原理が、生産方式の典型と考へられるのである。これ即ち農工一致の生産方式である。

最近の機械發達の段階に於ては、萬能的工作機械は、既に専門的工作機械にかはり、機械の専門化は熟練工を大衆化せしめ、部分品は遂に大工業を離れて、廣く田園に於ても生産し得るに至つた。又電氣動力が普遍化して、家庭に於ても容易に使用し得るやうになり、家庭工業勃興の氣運にある。かくして從來土から離れてゐた工業は、再び土と結びつくこととなり、農工

が今や機械の進歩によつて一致協調せしめらるゝことゝなつた。手工業的家庭生産は一變して、機械化的家庭生産の段階に到達したのである。これは我國に於ても、現に大河内博士の下に行はれつゝあるところで、技術的にも、衛生的にも、偉大なる効果を擧げつゝある。これに著目した獨逸は、今しきりに此の方策を採用し、之を普遍化せんとしてゐる。

此の如き農工一致の生産方式が、第二次産業革命の生産方式であり、かくして生産された物資を確實に國民に分配し、國民をして憂ひなく、充分に職域を通じて翼賛の任務を果せしむる新しき「商」の働きが起らねばならぬ。商業者は、從來の如き私利追求に止まるを得ず、物資の円滑なる配給によつて國民生活を保證するものとして、そこに天業翼賛の使命觀に生くるものとならねばならない。かくして農工商皆天業翼賛の大道に歸一することになるのである。

就中農は、民族生命を涵養するものであつて、農村は民族力の源泉地として復興再建せられねばならぬ。民族本然の姿にかへるところから發する農本思想は、また直ちに民族文化の復興を意味し、民族傳統の多分に殘されてゐる地方文化の建設を要請するに至る。

かくて民族傳統に根ざす「地方文化」の振興と共に、農を本とする自給自足主義の生産方式が樹立され、國家全體の自給自足的なる精神經濟が確立實踐されるならば、自由資本主義時代

に見られなかつた驚く可き經濟力が生れてくる。

此の如き自給自足的經濟は、先づ「國土計畫」が樹立されることを前提とする。

佐藤信淵は、既に彼の皇道世界經綸の大抱負を實現するために、「國土經緯」といふ名稱の下に、今日の國土計畫の思想を述べてゐる。昭和十五年九月二十四日、政府は開議に於て、

「國土計畫設定要綱」を決定し、現在研究が進められてゐる。其の趣旨に曰く

「肇國ノ理想ニ基キ、時勢ノ進運ニ對應シテ新東亞建設ノ聖業ヲ完遂スル爲ニハ、東亞諸邦ヲ對象トスル綜合的經濟計畫ヲ樹立シ、之ヲ基準トシテ國力ノ飛躍的増強ヲ圖ルノ要緊切ナルモノアリ。

即チ日滿支ヲ通ズル國防國家態勢ノ強化ヲ目標トシテ國土計畫ノ制ヲ定メ、地域的ニハ滿支ヲ含メ、時間的ニハ國家百年ノ將來ヲ合セ稽へ、産業、交通、文化等ノ諸般ノ施設及人口ノ配分計畫ヲ土地トノ關聯ニ於テ綜合的ニ合目的ニ構成シ、以テ國土ノ綜合的保全利用開發ノ計畫ヲ樹立シ、一貫セル指導方針ノ下ニ時局下諸般ノ政策ノ統制的推進ヲ圖ラントス。」

これは、「基本國策要綱」に於て、「綜合國力の發展を目標とする國土開發計畫の確立」とさるのにもとづいて、企畫せられたものである。

尙この趣旨に基いて、同年十月二日「日滿支經濟建設要綱」が閣議決定として發表せられた。其の「基本方針」には、

日滿支經濟建設ニ關スル皇國ノ指導精神ハ、八紘一宇ノ大精神ニ基キ、日滿支三國ノ一體的協同ニ依リ共存共榮、全般ノ福利ヲ増進スルニ在リ
と述べられてゐる。

既述の如き皇道經濟思想の下に、國內及日滿支の經濟建設が企畫され、續いて大東亞の規模に於ける東亞國土計畫の樹立されるのも、遠いことではあるまい。

更に國內に於ては、「經濟新體制確立要綱」「財政金融基本方策要綱」「科學技術新體制確立要綱」「勤勞新體制確立要綱」「人口政策確立要綱」「交通政策要綱」等が次々に決定された。そのうち或ものは具體的に實施されたものもあるが、今後の問題はこれの徹底的實施である。實施に當つては、之を施行する官吏の側に於ても、その實行を擔當する國民の側に於ても、共にこれ 天業翼賛のために爲さるゝものであるといふ皇國經濟理念の透徹が必要である。即ち翼賛精神の徹底を期する翼賛運動が、此の如き經濟施策の圓滑なる實施を可能ならしむるものである。されば翼賛會實踐要綱は、其の第四に於て

「經濟新體制の建設に協力す。即ち創意と能力と科學を最高度に發揮し、翼賛精神に基く綜合的計畫經濟を確立し、以て生産の飛躍的増強を圖り、大東亞に於ける自給自足經濟の完成に努む」と述べてゐるのである。

八世紀の預言

天皇信仰に灼熱せよ

今や我國に於ては、かつての「政黨政治」も、又「新官僚政治」も、共に皇化せられて、「翼賛政治」にかへらねばならぬ。翼賛政治とは、兆民をして、天與の能力を十二分に發揚せしめ以て天業翼賛に奉仕せしむる政治であるから、適材を適所に任じ、野に遺賢なからしめ、民族的潜在能力を、最大限度に發揚せしむることである。これまことに高度國防國家體制建設の前提條件である。かくて結局に於ては、外面的な統制は不必要となり、自發的に生産力は擴充せられ、又、民族使命遂行に必要な科學的技術も飛躍的に優秀化され、各種の發明もどしどし行はれるのである。經濟人も、文化人も、「個人意識」を止揚して、「臣道意識」に目覺めなければならぬ。臣道意識は又我が民族意識であり、更に 天皇に於て、自己の有限生命が湧出する無限生命の源泉を直感する血の本能である。それは 天皇に對する宗教的信仰であり、こ

れが國體原理の中核である。

天皇信仰は、天業翼賛の精神的原動力であつて、世界新秩序建設、東亞共榮圈の確立に對する、不撓不屈の逞しき情熱的實踐は、これ以外からは生れて來ないのである。天皇信仰が一億國民に徹底すれば、政治は勿論淨化され、經濟機構も自ら完備し、統制は自然に圓滑化され、生産は驚異的に増加し、世界皇化の實力が無限に湧出して來るのである。

天皇信仰の深き情操を、すべての日本人の心のうちに呼び起すことが、大政翼賛運動の出発點であり、又その窮局の目標である。此の意味に於て、それは實に日本的に、最高なる宗教運動であらねばならぬ。翼賛會の行ふ國民訓練も、其他、今後に行はるべきいづれの講習練成會も、すべて 天皇信仰をいや高く、いや深く、國民に植ゑつけることを中心目標とせねばならぬ。

自由主義とマルクス主義が克服されねばならぬその根本的な理由は、前者が政治と宗教とを分離せしめんと欲するものであり、後者が無神論の唯物論なるが故である。此の二つの思想は、共に人間の本性を全體的に把握せざる淺薄なる合理主義である。皇國に於ては、祭政教軍が一致し、之等は、國民の全生活を其の根柢に於て貫く宗教的情操と、一體不離なのである。現實

にまします

天皇に對する信仰こそは、單に冥想の所産に過ぎない異邦宗教のすべてが歸宗すべきところであり、世界人類を現實世界に於て救済し得るところの絶對宗教である。

我等は今こそ、死して永遠の民族生命に生き、靖國の神と祀られたる皇軍將兵達の聖なる信仰を、國民皆兵の一億の心深く確乎として植ゑつけなければならぬ。「天皇陛下萬歳」と叫んで護國の鬼と化し、今や靖國の御社に神鎮まります幾萬の英靈は、幽界にありて我等顯界にある者と力を協はせ、すめらみことの天業を翼賛し奉るのである。これ顯幽一如永遠の翼賛である。日本國民は、天皇信仰に生くる限り、顯幽に出入し永遠無窮の翼賛道に生くるのである。翼賛會構成員は、此の信念に透徹する同志であることが絶對に要請される。近く全國的組織を見んとする「大日本翼賛壯年團」は、基本組織方針に於て、「青壯年層の自發的翼賛意志に依つて結集する同志、精銳組織たること」と規定して居り、自發的同志組織體たることを根本要件としてゐるが、それは實に、かゝる思想信念の同志たることを要請してゐるのである。即ち團員銓衡の規程には、「思想信念に於て國體の本義に徹し、苟も衆人の疑惑を受くることなきもの」といふ條項を第一に掲げてゐる。此の如き同志による翼賛運動の強力果敢な展開によつ

て、はじめて大東亞戰爭はその最期の目的を完遂し得るのである。

明けゆく世紀

紀元二千六百年は、「思フ神武天皇ノ創業ニ勝セ」肇國の大理想を回顧し、鮮明し、以て來るべき大飛躍に對する十分なる精神的準備をいたすの年であつた。國體に對する深き認識と二千六百年の歴史的回顧とは、將に來たらむとする世界史の黎明に對して、皇國の進むべき明確なる方向を顯示するのである。即ち「惟神ノ大道ヲ中外ニ顯揚」することが皇國の進むべき方向であることが明らかにされた。これ現神人たる すめらみこと 天皇の一億國民に昭示し給ふたところであつた。

かくて紀元二千六百一年は、當然、明らかにされた皇國理想の實現に向つて、實踐の巨歩を踏みいだすべき年であらねばならぬ。それは必然の神意であつた。此の年に於て大東亞戰爭の開始せらるゝは決して偶然ではないのである。

紀元二千六百二年は、世界新秩序建設への巨歩が、着々踏み出だされ實現され行く、世界維

新の曉でなければならぬ。此の朝ぼらけにつらなる今世紀は、正に世界維新完成、八紘爲宇世界一家體制實現、世界神政復古の世紀である。世界は現實の「ただよへる」姿から修理固成されて、「すめらみこと」の御親政の下、世界人類が太古のかつて在りし本然の姿にかへり、各々其の所を得て、統一せられ、「天國」を地上に建設するのである。

云ふ迄もなく我々の信仰に於て、天皇は日本の天皇であらせられると同時に、全人類大祖先の靈統、並に血統をその儘に繼承し給ふところの、世界の天皇であらせられる。太古の史實は、天地開闢以來姓氏を有せられぬ天皇の御本質を解明し、世界の天皇たるべきことを宣言してゐるのである。唯現在の處では、不幸にして世界の諸民族が、此の宇宙絶対の眞理を未だに把握認識せず、その爲に、眞の大和の人類生活が實現されてゐないまでのことである。

然し乍ら、大宇宙生命の神祕極りなき運行循環により、今迄分裂と相剋と鬭争の巷に彷徨して來た人類は、今日以來、再び天皇のもとに無理なく統一せられ、彼等が八紘爲宇の聖業に參畫し翼賛すべき神機が到來しつゝあるのである。

惟神の大道は實に世界人類が歸一すべき唯一絶対の大信仰である。從來世の學者、思想家、

宗教家等は、惟神の道は、一日本民族の民族的信仰に過ぎないものであつて、何等世界的本質を有せず、従つて、佛教や基督教のみが世界人類を納得せしむる絶対的信仰でもあるかの如くに説いて來た。然し是は、長くも天皇が世界全人類の等しく歸一すべき絶対の「現人神」であらせられるといふ重大なる事實を認識しなかつたことから出た誤謬である。

皇國は、其の字の示す如く實に「天皇國」である。天皇に對する宗教的信仰を離れた「報國」は無意味であり邪道である。從來の如き單なる愛國思想、又は報國思想は、反省されて是正されねばならぬ。足利高氏でも外國の侵寇に對しては愛國者として起ち上つたかも知れない。天皇國への自覺と、深き天皇信仰の情操のみが、我が國體を維持するのである。冷やかな法治主義的合理主義では國體は到底把握できぬ。天皇こそは宇宙絶対の現人神であらせられ、佛教の「佛」も、儒教の「天」も、基督教の「神」も、天皇をまつてはじめて觀念的冥想的存在より脱却し、内容を與へられて眞に其の力を發揮し得るのである。實に佛教・儒教・基督教・猶太教・回教等は、皆我が惟神の大道を世界各國に教傳する爲の方便として説かれたものであつたことを知らねばならぬ。

此のたび對ソ戰場からベルリンに歸還したヒットラー總統は、久し振りで一大獅子吼を試み

たが、その中で、「神の攝理は新時代の創生といふこの偉大なる目的のために余を選んだ」と述べてゐる。

恐らくヒットラー總統の心に通ふ神は、基督教の抽象的神に非ずして、「現人神」であつたといふことに將來必ず氣付くであらう。ヒットラー總統の靈覺が鋭く目醒めれば目醒める程、この絶對眞理は彼にとつて疑ひ無きものとなるであらう。獨逸は既に述べた如く、無意識的に我が惟神の大道に歸依しつゝあるのであつて、獨逸新興青年層は、民族的背景のない基督教から急速に離反しつゝある。

次第に明けゆく今世紀の運行は、變て世界の、曾てありし「神政の再興」となり、天皇が、全人類の天皇として君臨し給ふに至るであらう。かくて時の運行と共に、各種の既成宗教は自ら解消し、人類は惟神の大道を唯一の信仰として、それに心から歸一するであらう。

既に述べた如く、「臣道の實踐」とは、「承詔必謹」を意味する。承詔必謹とは、一億臣民が例外なく皆神勅並に詔勅を、「絶對的指導原理」として仰ぎ、その中に示し給ふところを力強く、亦、赤誠を以て實踐して行くことである。

明治三年正月三日に渙發せられたる大教宣布の大詔は

朕恭シク惟ミルニ天神天祖極ニ立チ統ヲ垂レ列皇相承ケ之ヲ繼キ之ヲ述フ。祭祀一致億兆一心治教上ニ明ニ風俗下ニ美ナリ。而シテ中世以降時ニ汚隆アリ道ニ顯晦アリ治教ノ洽ネカラサルヤ久シ。

今ヤ天運循環シ百度維レ新タナリ。宜シク治教ヲ明ニシテ惟神ノ大道ヲ宣揚スヘキナリ。

因テ新タニ宣教師ヲ命シ以テ天下ニ布教ス。汝群臣衆庶其レ斯ノ旨ヲ體セヨ。

と仰せられ、紀元二千六百年祝典の御勅語は

我カ惟神ノ大道ヲ中外ニ顯揚シ以テ人類ノ福祉ト萬邦ノ協和トニ寄與スルアラシキトヲ期セ

ヨ
と述べさせ給ふ。

今や我々は惟神の大道を、我が國內は勿論、廣く世界全體に宣揚すべき宣教師となり、雄渾無比の世界的大經綸を樹立して、如實に「坤輿ヲ一字」たらしめ、全人類を天^{すめらみこと}皇のしろしめし給ふ一大家族に統合しなければならぬ。

神意の開顯

畏くも大東亞戰爭戰宣の御大詔に

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國 天皇ハ
と仰せられ

清國に對する宣戰の詔に於ては

天佑ヲ保全シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國皇帝ハ
と仰せられ、露國に對する宣戰の詔に於ても

天佑ヲ保有シ……

と宣ふてゐる。

天佑とは天の冥助であるが、この天とは 皇祖皇宗の神靈に外ならない。即ち宇宙生成化育・宇宙攝理を行ひ給ふ 天照皇大神以來、歷代皇祖の御神靈は、「神籬磐境の御神勅」に示された如く、幽界より永遠無窮の皇運を御護りなされて皇室の彌榮を圖り給ふのである。されば皇

天の御加護の下に天業の恢弘を念願し給ふ 陛下の大御業ハカセは、必ず神明の御援助によつて完成せしめられるのである。

天皇信仰は宇宙中心生命への歸依であり、宇宙攝理への冥合であつて、こゝに死して尙永遠の生命に生くる顯幽一如の世界が現出する。こゝに現世顯界と、死後幽界の隔絶せる世界諸民族の世界觀の窺知し得ぬ幽玄無比なる國體の眞髓が存する。

大東亞戰爭の勃發せるは宇宙攝理の開展であり、神意の開顯に外ならない。その故に宣戰の御大詔に於て、「 皇祖皇宗ノ神靈上ニ在リ」と仰せになつたのである。神靈正に上に在り、幽界より、顯界に於ける忠誠勇武の國民翼贊の活動に働きかけられて、これと一如の姿に於て天業恢弘を御支援遊ばされる。かくて肇國の大使命たる世界一家體制の確立は、天の攝理として、着々と實現されてゆくのである。これ、人のはからひに非ず、實に神の御はからひであつて、英米如何に抗すとも、舊世界の崩壊は必然である。かくて國體に徹する限り、我等はこゝに必勝の信念を堅持するのである。

併し乍ら 皇祖皇宗の御神靈は、日本國民が國體に徹し絶忠無二の誠を捧げて奮闘努力するときに、はじめて顯幽一如となつて加護し給ふのであつて、我等が國體に深く味到し、 天皇

信仰に燃え、舉國一體協心戮力するとき、世界の如何なる敵も撃碎し、以て大稜威を宇内に耀かすことが出来る。國民が斯く必勝の信念を堅持して進むとき、世界皇化は期せずして達成されることは必然なのである。

されば、大東亞戦争の勃發するや、英米が其の頼みとせる太平洋艦隊並に東洋艦隊は、皇軍必勝の信念の前に數刻にして海の藻屑と化し去り、東亞に於ける彼等の牙城は、朝に一疊夕に一城を抜かれ、殆ど手の下しやうがなくなるのである。

世界史大轉換の神機は今や到來し、東亞諸民族は、過去の奴隷状態から救済されるの秋至れりと感奮し、皇國の進撃に和衷協力しつゝある。亞細亞人の亞細亞は日ならずして成るであらう。東條首相が去る一月廿一日、議會再開劈頭に於て發表した大東亞の構想は、刻一刻實現への過程を辿りつゝあり、フィリッピンは米國の搾取より脱却して獨立し、蘭印・ビルマの獨立も遠いことではあるまい。印度の解放は又必然の勢ひとなり、大東亞皇化圈の形成は、英米の經濟的弱少化を招來し、更に英米に與へられたる精神的打撃は、自ら内部崩壞の因となり、舊世界はこゝに瓦解して、日獨伊樞軸國の手による新世界の建設が開幕するのである。

而して惟神の大道、宇内に顯揚さるゝところ、更生せる民族全體主義諸國家亦皇國の周圍に

遊星の如くまつろひ來たり、宇宙生命の嚴たる不動の秩序が樹立され、萬邦各其の所を得つゝ共榮する世界眞平和の出現となる。これ第二十七世紀に於ける世界の姿である。

我等新世紀の曉明に立ち、嚇々たる神皇の大稜威を仰ぐとき、天意は生々として實現し、天運は肅々として循環し、地上に再び天の岩戸の開かれつゝあるを直感せずには居られない。

有共者行設者著は權作著書本

昭和十七年三月十日印
昭和十七年三月廿日發
行 刷

◎定價一圓八十錢

(世紀の預言 奥附)

製 複 許 不



著者	藤澤親雄
發行者	東京市日本橋區通三丁目六番地 今村源三郎
配給元	東京市神田區淡路町二丁目九番地 日本出版配給株式會社
印刷者	東京市芝區濱松町一丁目十三番地 植田庄助

發行所

東京市日本橋區
通三丁目六番地

偕

成

社

報替口座東京一三五二番

電話日本橋(24)〇二三五番

石丸 梧平著
日本的教養

新しき人生論。これからの生き方！
著者は理論のみの羅列を避け端的に
且つ平易に激動期に處する正しき世
界觀と時局を棄切る心構へを語る。

價一・五〇
千・一〇

石丸 梧平著
青春の智慧

若き日の不満・焦燥・悩みに答へた
書、青年の良き理解者たる著者が若
き日の體驗を以て青春の凡ゆる問題
―戀愛・結婚・職業・立身等を語る

價一・四〇
千・一〇

石丸 梧平著
青年への手紙

變革期に臨み吾等如何に生くべきか
：の問題を死生觀・結婚觀・職業觀等
に亘り暖き理解を以て語る、青年の
使命と新秩序への道標を此書に汲め

價一・五〇
千・一〇

山中 巖太郎著
肚で行く

「やり送げるのは頭でなく肚だ」
二百數十の興味ある古今の實例を擧
げて肚の修練を説いた近來の快著。
一讀直ちに肚が振はる！

價一・二〇
千・一〇

山田 忍三著
頑張る力

「缺點のないやうな人は駄目だ」と獨
得の勇氣と熱を以て實業界に鳴る山
田氏の體驗を基礎とする頑バリズム
使ふ人、使はれる人への新指導書。

價一・二〇
千・一〇

菅原 兵治著
村を護る

土に生き、村を愛し、村に献身する
著者が烈々たる熱情、豊かな詩情の
中に村の新たなる使命を説き、その
本來の面目を語る。(文部省推薦書)

價一・五〇
千・一〇

菅原 兵治著
野の二宮尊徳

深峻なる哲人としての二宮、東洋的
指導者の一典型としての二宮の人物
と教學に直參するの書、われ等に無
限の示唆と感銘を與へるであらう。

價一・六〇
千・一〇

藤澤 親雄著
世紀の預言

冷やかな知性を誇る預知識人の更生
は切實に裏寫されてゐる、本書は新
スメラ世界建設に挺身すべき信念的
知識層の行手を照す時代の炬火だ。

價一・七〇
千・一〇

今村 正一著
人間性

新界の第一人者が生理學・心理學等
の綜合科學的立場から人間性を解剖
し其の改良への指導を與ふ、實例に
富み平易、未發の野を開拓せる書。

價一・八〇
千・一二

今村 正一著
最新家庭教育

兒童の感情指導に關する新説として
定評ある名著、家庭別・年齢別・環
境別等凡ゆる觀點から兒童の感情統
制の仕方をわかり易く説いてゐる。

價一・五〇
千・一四

友松 圓 諦 著

人 間 と 死

死の問題を解決し、生の眞意義を説く。豊富な材料を縦横に使ひつゝ日本精神を語り、死と死後を語り、また佛教の面目を平易に傳へてゐる。

價一・五〇

友松 圓 諦 著

母 心

女性の幸福、母の行くべき道を説いた書。「母は新たな確信を得、子はその恩恵に浴び起つた」等感激の書殺到。母も、父も、子も必讀の書。

價一・五〇

友松 圓 諦 著

父 心

新時代の男性道、父の悩みに答へた新聖典。一家の富士山としての父、統率者開拓者としての男性のあるべき眞の姿を説いた好個の人生讀本。

價一・五〇

友松 圓 諦 著

法 句 經 講 義

聖典の眞實の言葉と云はれる佛教の根本聖典を平易に説いた書。老・病・死・怨・戀その他凡ゆる人生の苦悶がこの書の中に解決されてゐる。

價一・五〇

友松 圓 諦 著

佛 教 入 門

廣大無邊、凡ゆる物を抱擁する佛教、民族性格の源泉たる日本佛教の深淵な教理を、日常生活に即せる「生ける佛教」として平易明快に説いた書。

價一・七〇